

年少非行に関する研究（第5報）

養護施設入所児の非行傾向に関する調査研究

研究第6部 石井哲夫・権平俊子・神田久男
山本清恵・吉川政夫・野田雅子
稗田涼子

研究第9部 福島一雄

共同研究者 下平幸男（厚生省児童家庭局企画課）
長谷川重夫（東京育成園園長）

はじめに

研究第6部は、この数年、年少児の非行問題にとりくんできている。すなわち、我国の地域ケア問題のパロメーターとして、年少児の非行の量質の推移を調べること、その予防や早期対処のために、学校を中心として、相談機関や、その他児童関係機関や、住民の地域活動などがどのようにかかわっているのかを調べて来た。その結論としては、非行にかかわる我国の社会病理的状況を考えざるを得ないところまで来ているわけである。すなわち、年少非行の発生の基盤としての家族機能の失調や、学校教育の変動などは、もはや危機的状況に立ち至っているということが感じられるし、社会の諸制度下にある機関や、自究的と思われる住民活動なども、そのチームワークを必要とする声が高まる割には、その実現への歩みが認められない現状である。辛うじて、これら関係機関や組織の中で、意識の高い、活動力の旺盛な個人によって、予想外の成果をあげることに、その機関の社会的位置づけが支えられていると言ってよい。ここで、この一連の研究を総括して、年少非行への再考を行う必要性を感じたわけである。先に述べたような我国の児童福祉にかかわる社会病理的状況の本質をめぐって、新たに、個別的な非行発生の機序に立戻ってこなければならぬのである。つまり、個別的な非行発生の機序として、家庭養育学科の検討から考えなおしていくという状況に立ち至っているのである。とくに非行と情緒障害と考える心理学的な通説に基づいて、家族間の情緒育成問題に精力的にとりくむことが必要と考えるわけである。

本研究は、厚生省児童家庭局下平幸男専門官の示唆も

あり、児童福祉分野における養護施設に注目し、そこから、現代社会の病理的傾向を考えていこうということになり、本調査研究を行うことになったわけである。調査研究を行うに当たり、全国養護施設協議会の長谷川重夫、福島一雄の両氏に、研究員に参加していただき、絶大な御指導、御協力をいただいたことを報告し感謝の意を表したい。又従来回収率の点で問題を感じる施設職員や施設内児童からの高い回答率を得たことも報告し、施設長はじめ協力下さった職員、園児の方々に厚く御礼の意を表したいと思います。

調査研究の目的

養護施設において生活している子どもたちの研究は意外と少ない。それは子どもといえども生活者としてのプライバシーにふれる問題だからである。ただ、児童福祉施設のような職員が入所児の代弁者あるいは利益代表者の役割をもつ場合、むしろその生活を検討して、世の中に訴えていくという役割をもつべきであろう。ただ職員は、このような子どものおかれている状況を自らの勤務能力や態度と深い関係なしに考えないわけにいかないの、問題点を伏せる傾向が生じてくるわけである。石井自身、養護施設の指導員としての経験もっているの、むしろ子どもの処遇の前提となっている入所以前の子どもの家庭生活条件や、措置費にかかわる行政上の考え方などに多くの問題を感じていたの、機会ある毎に、施設内の子どもの生活の調査や、子ども自身の訴えを求める調査を試みようとしたが、十分果せなかった。しかし時代の推移とともに養護施設側からも、入所児の全生活をみわたした上での人権問題に注目する動きが起きるようになり、まず養護施設入所以前の家庭問題を今日的な

児童福祉問題という認識を抱くようになって来た。

今回の調査は、「はじめに」において記したように、本研究部第6部に課せられた数年間にわたる「年少非行問題研究」の結果考え出されて来た「養護施設入所児の非行検討」である。言うまでもなく我々は非行を社会的な立場から考えているのではなく、子どもの発育する上での精神的な処遇との関連で「情緒障害」というとらえ方をしている。従って、気の毒なのは非行児というレッテルを貼られる子どもであり、本来問題としなければならぬ家庭生活や、家庭の中での家族関係を乱している社会情勢については、評論するのみに止められているのである。そこで我々は、養護施設という生活の場において、これらの問題がどのように表われているのかわかりたいと考えたのである。

つまりこの調査研究の一つの仮説として、非行（情緒障害）の発生根盤を子どもの生育史上早期にあると考え、施設入所児の大半が経験している崩壊しつつある家庭と家族機能の失調が、どのようなものか、それを探るためには、施設内でどのような適応状況にあったかを、子どもと職員の双方に調査を行い、これを照合して、施設内の情緒障害の改善又は増悪傾向を調べてみる。そこから情緒障害改善の条件となるものを養護施設内の機能から求めることが出来るかどうか。このことを、普遍化して社会の年少非行対策のキーポイントとして考えてもよいと思うからである。とくに養護施設職員との関係を詳細に調べることによって、この子等の対人態度の形成状況をつかむことになると思うからで、ここに焦点をあててみたいと思っている。

調査研究の方法

1. 調査対象および標本数

今回、調査の対象となった施設は、東京都が所管の民営の養護施設（52施設）の中から、幼児を対象とした4施設と高校生以上を収容している1施設を除いた47施設である。各施設の所在地は、東京23区内が20施設、都下が19施設で残りの8施設は各県に散在している。

対象となる児童の年齢範囲は小学5年生から中学3年生までの男女とした。これに該当する児童の数は概算で1,000名を若干越える数になるので、各施設にはこの中から10名を抽出し回答してもらうように依頼した。したがって、調査対象サンプルは全体で47施設・470名となる。尚、サンプル抽出に際しては、①小学校5年生から中学校3年生までの男女、②非行傾向をもつ、あるいは以前に非行傾向のあった児童と、非行傾向が認められな

い児童の比は概ね半数ずつ、③小学生（5・6年生）は全体の3～4割程度含める、という3つの条件が加えられた。

2. 調査票

それぞれの施設には「施設職員に対する調査票」と「児童本人に対する調査票」の2種類の調査票を10部ずつ郵送し、結果を回収した。「施設職員に対する調査票」というのは、当該児童の生育歴や性格・行動の特徴等について施設の職員に記入してもらうものであり、「児童本人に対する調査票」は児童の意識や願望、それに日常生活等について、文章完成法（SCT）を中心とした質問項目に児童本人が記入するようになっている。

各調査票の質問項目の骨子は以下の通りである。

「施設職員に対する調査票」

- (I) 児童の施設歴
- (II) 家庭環境
- (III) 親と子の人間関係
- (IV) 性格特徴
- (V) 施設内での様子
- (VI) 本人について（非行・反社会的問題行動、非社会的問題行動、心身発達上の問題、学校への適応）

「児童本人に対する調査票」

- (I) 文章完成法（SCT）
- (II) 3つの願い
- (III) 熱中できる対象
- (IV) 親しい好きな友達との条件
- (V) 嫌いな友達との条件
- (VI) 寮の先生に対する認知

記入後は児童自身で封筒にのりづけし、寮の先生に提出するように、との旨調査票の最後に指示した。実際の調査票については付表を参照。

3. 調査票の回収結果

返送された調査票は36施設・345名であり、回収率は73.4%。その内訳をまとめると、

男女比	男子 …… 187 (54.2%)
	女子 …… 158 (45.8%)
学年別	小学4年 …… 1 (0.3%)
	小学5年 …… 48 (13.9%)
	小学6年 …… 63 (18.3%)
	中学1年 …… 71 (20.6%)
	中学2年 …… 79 (22.9%)
	中学3年 …… 80 (23.2%)
	高校1年 …… 3 (0.9%)

尚、調査項目によっては回答が不明であったり、無回答の場合があるため、各項目ごとの全サンプル数には多少の変動がある。

結果と考察

I. 施設職員に対する調査の結果と考察

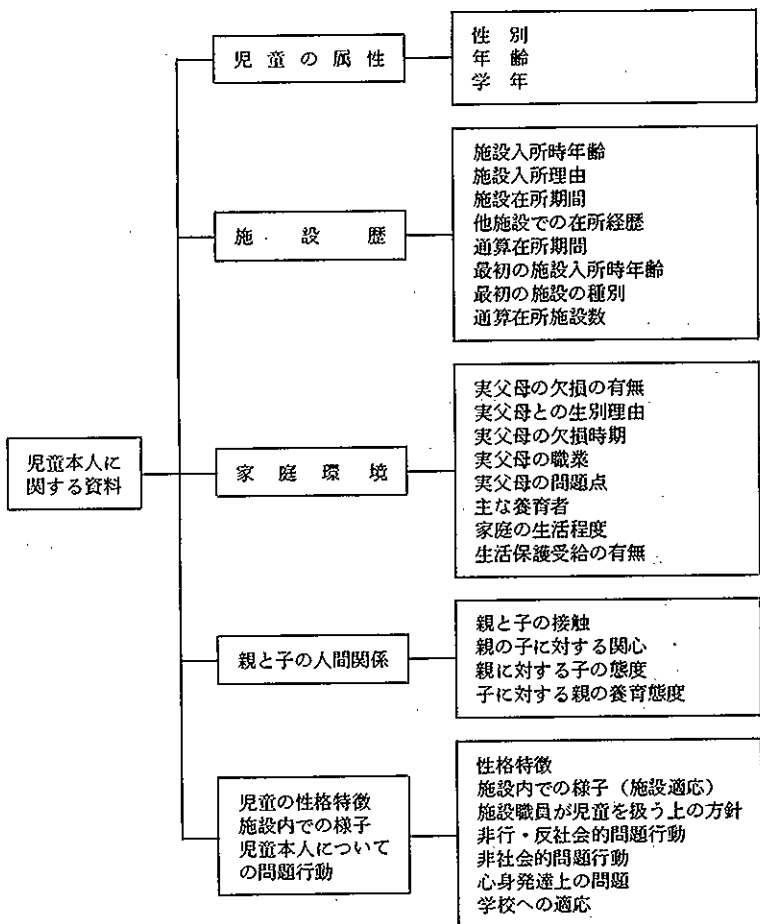
本調査は、調査対象別に、「施設職員に対する調査」と「児童本人に対する調査」から構成されている。以下ではまずはじめに、「施設職員に対する調査」についてその結果と考察を行う。

「施設職員に対する調査」の内容構成は図I-1のようである。調査票の全文は資料として末尾に付けられているが、主要な質問事項は、児童の属性、施設歴、家庭環境

環境、親と子の人間関係、児童の性格特徴、施設内での様子、児童本人についての問題行動である。具体的な質問は、主要な質問事項を構成する下位の質問項目によってなされた。

以下の結果のまとめと考察においては、「主要な質問事項および各質問事項と非行傾向の有無との関連性」について検討する。そのために、非行・反社会的問題行動の有無にもとづいて調査対象となった施設の児童を非行傾向有群と非行傾向無群に大別した。そして、各質問項目に関する結果は非行傾向有群と非行傾向無群に分けて表示され、考察の主眼は2群の結果の比較検討におかれた。

以上のような結果の表示法と考察の観点にもとづいて、以下、「施設職員に対する調査」から得られた内容に触れてみたい。



図I-1 施設職員に対する調査の内容構成

(I) 施設職員に対する調査結果全体の概要

1. 非行傾向の有無について

1) 有効サンプル数 345 のうち、過去に非行傾向ありが 162 人 (47.0%)、なしが 163 人 (47.2%)、不明・無答が 20 人 (5.8%) であった。また、現在非行傾向ありは 75 人 (21.7%)、なしが 248 人 (71.9%)、不明・無答が 22 人 (6.4%) であった。過去の非行を行った平均年齢は 10.2 歳である。

2) 結果は非行傾向有群と非行傾向無群に分けて表示され、考察は 2 群の結果の比較検討によって、各質問項目 (独立変数) と非行傾向の有無 (従属変数) との関連性を求めた。

3) 非行傾向有群とは過去もしくは現在に非行や反社会的問題行動を示したことがある児童すべてである。すなわち、過去・現在ともに非行傾向あり群と過去のみ非行傾向あり群と現在のみ非行傾向有群を合わせた全体であって 169 人を数えた。非行傾向無群とは、過去・現在ともにまったく非行傾向のない群であって 156 人を数えた。

4) 表 I-1 は、施設職員に対する調査の各質問項目と非行傾向の有無との関連について分析した結果をまとめたものである。表の見方を簡単に説明すると、各質問領域の項目が非行傾向の有無と統計的に有意な関連をもっていた場合は○が、関連をもっていなかった場合は×が付してあり、一目で質問項目全体の結果が見渡せるようにしたものである。関連があった場合、非行傾向ありが多い具体的条件は何かを各項目ごとに表わしたものが非行傾向ありの欄である。

5) 表から、非行傾向の有無と関連の深い質問領域は児童本人の属性と問題行動であり、家庭環境がそれに次いでいる。施設歴や親子の人間関係の領域はほとんど非行傾向の有無と顕著な関連をもちえなかった。

2. 児童本人の属性および問題行動と非行傾向の有無

1) 質問項目ごとについていえば、まず、男子は女子よりも非行傾向ありの割合が多かった。また、年齢、学年が高いほうが低い場合よりも非行傾向を示す割合が多かったが、これは非行傾向有群の性質 (過去もしくは現在の非行傾向ありの児童すべて) を考えれば当然である。

2) 非社会的問題行動の有無と非行傾向の有無とは関連が深く、非行傾向をもつ児童は非社会的問題行動や非社会的性格特徴を合わせもつ場合が多いことがわかった。そのような重複した問題行動を示す児童がいる一方、非

行傾向も非社会的問題行動も示さない健全な児童も多かった (全体の 35% 前後)。

3) 知能段階と非行傾向の有無はまったく無関係であったが、学業成績と非行傾向の有無には深い関連が見い出された。すなわち、勉強のできる児童で非行傾向のあるものは少なく、勉強のできない児童で非行傾向のあるものは多かった。また全体的傾向として、小学校、中学校ともに学業成績不良の児童の割合が大きく (小学校 47.8%、同じく中学校 64.4%)、とくに中学生の学業成績には問題が多かった。

4) 学校生活での問題行動をもつ児童には非行傾向ありの割合が高く、逆に学校生活で問題行動を示さない児童には非行傾向ありの割合が低かった。学校への適応上の問題行動でもっとも多いのは学力不振であった (全体の 22.4%)。この結果は学業成績の不良の結果と一致する。非行傾向有群が無群に比べて多く示す問題行動をあげると、学力不振、遅刻、無断欠席などの勉学態度の問題、校則違反をする、学友とのトラブルがあるなどの攻撃的な生活態度になる。

5) 児童本人の性格特徴と非行傾向の有無とは関連がみられた。非行傾向有群の児童は無群の児童に比べ、暗い、強情、意志が弱い、だらしがない、やる気がない、あきっぽい等々の 16 の性格特徴において好ましくない傾向を相対的に強くもっていた。

6) その傾向は施設内での様子に関しても同様に見い出され、非行傾向有群の児童は無群の児童に比べ、扱いにくい、気持ちが通じない、人に嫌われている、弱い者いじめをするなど 10 の態度項目において好ましくない傾向を有していた。

3. 施設歴と非行傾向の有無

1) 現在の施設への入所時の平均年齢は全体で 7.3 歳であり、現在の施設での平均在所期間は 5.4 年であった。いずれも非行傾向有群と無群の間で違いはみられなかった。

2) 非行傾向無群と比べて非行傾向有群に多くみられる施設入所理由は、本人の問題行動、遺棄、養育拒否、虐待であった。施設に入所している児童はそれぞれ厳しい生育歴や家庭環境を体験してきているが、非行傾向有群の児童たちの家庭環境は中でも奇酷なものであることがうかがわれた。

3) 他施設での在所経歴の有無は非行傾向の有無と関係がなかった。また、全体で、通算在所期間の平均は 6.4 年、最初の施設入所時年齢の平均は 6.4 歳、通算在所施設数の平均は 1.4 施設であったが、いずれの場合も、非

表I-1 施設職員に対する調査の各質問項目と非行傾向の有無との関連の分析

質 問 項 目		非行傾向の有無との関連	非 行 傾 向 あ り
児童本人の 属性と問題行動	1. 性 別	○	男 子 > 女 子
	2. 学 年	○	上 級 学 年 > 下 級 学 年
	3. 年 齢	○	年 齢 高 い > 年 齢 低 い
	4. 非社会的問題行動の有無	○	非社会的問題行動あり > " なし
	5. 知 能 段 階	×	
	6. 心身発達上の問題の有無	×	
	7. 学業成績の良否	○	学業成績不良 > 学業成績良好
	8. 学校生活での問題行動の有無	○	学校生活での問題行動あり > " なし
	9. 性 格 特 徴	○	性格が悪い > 性格が良い
	10. 施設内での様子	○	ふるまいが悪い > ふるまいが良い
施 設 歴	11. 施設入所時年齢	×	
	12. 施設入所理由	○	シビアな入所理由 > マイルドな入所理由
	13. 施設在所期間	×	
	14. 他施設での在所経歴	×	
	15. 現在までの通算在所期間	×	
	16. 最初の施設入所時年齢	×	
	17. 最初の施設の種別	×	
	18. 通算在所施設数	×	
家 庭 環 境	19. 実父の有無	×	
	20. 実母の有無	○	実母あり > 実母なし
	21. 実父実母の生別の理由	×	
	22. 実父の欠損の理由	×	
	23. 実母の欠損の理由	○	小さい年齢 > 大きい年齢
	24. 実父実母の職業	×	
	25. 実父実母の問題点	○	実父に問題点あり > " なし
親人と 親子関係	26. 主な養育者	○	(乳幼児期に)実父実母でない > " である
	27. 家庭の経済状態	×	
	28. 親と子の接触	×	
	29. 親の子に対する関心	×	
	30. 親に対する児童の態度	×	
	31. 子に対する親の養育態度	×	

○…関連あり ×…関連なし

行傾向有群と無群との間に違いはみられなかった。最初の施設の種別の場合も同様であった。

4) われわれは、在所した施設数が多いほど、施設生活が長くなるほど、あるいは施設への入所が低年齢であればあるほどそれらが児童に与えるインパクトは大きく、何らかの問題行動が児童に発生しやすいのではないかと

予想した。結果からは、施設生活によって非行の発生が予防されるとも言えないが、しかし少なくとも施設経験の長さに応じて非行傾向が醸成されるという仮説は否定された。何らかの問題行動としては、本調査の結果から非行や反社会的問題行動よりも非社会的問題行動のほうを施設の取り組むべき課題として指摘したい。

4. 家庭環境と非行傾向の有無

1) 実父の有無に関する全体の結果は、実父の欠損なし56.3%、欠損ありが43.7%で、非行傾向有群と無群で差はなかった。それに対して、実母の欠損なしは34.1%、欠損ありは65.9%で、非行傾向有群のほうが無群よりも実母の欠損率が少なかった。また、実父、実母の性別の理由に両群で差はなかった。

2) 実父の欠損の時期は平均で5.5歳であったが、実父の欠損の時期が早いか遅いかと非行傾向の有無とは関連がなかった。しかし、実母の欠損の時期(平均で5.4歳)と非行傾向の有無とは関連がみられ、実母を幼くして失った児童は非行や反社会的行動を起こしやすい結果がみられた。

3) 実父実母の職業、家庭の経済状態は非行傾向の有無と関連はなかった。

4) 非行傾向有群の実父の問題点で、酒乱・アル中、ギャンブル狂、ヤクザが非行傾向無群の実父のそれよりも有意に多かった。同様に、非行傾向無群の実父は有群の実父よりも問題点なしが有意に多かった。実母の場合、非行傾向無群の実母のほうが有群の実母よりもサラ金問題を多くもっていたが、それ以外に差はみられなかった。結果から、非行傾向の有無は、実母の問題点よりも実父の問題点と結びつきが強いといえる。非行傾向有の児童の実父に問題点をもつ人が多く、逆に非行傾向無の児童の実父には問題点をもつ人が少ない傾向がある。

5) 非行傾向の有無と主な養育者の関係についてみると、両群比較で乳児期には非行傾向有群に実父が多く、幼児期では非行傾向無群に実父実母が多かった。乳児期の養育に実父があたるということは、実母の養育機能の欠如を意味する。非行傾向有群は無群と比べて乳児期に実母の養育機能の欠如が多く、同様に幼児期においても有群は無群に比べて実父実母の養育機能の欠如が顕著であった。このことは、幼少期における実父実母の養育機能の欠如が非行傾向の発生をもたらすというわれわれの当初の仮説が支持されたことになる。これは、非行の発生の有無が施設歴の要因や条件に起因するのではなく、幼少期における母親の養育機能を中心とした家庭環境の要因や条件によって強く左右されることを確認する結果である。それを裏づける結果として、先の実母の欠損時期と非行傾向の有無において、母親の欠損時期が幼い時ほど非行傾向を示しているケースが多かったことがあげられる。また、先の実母の有無と非行傾向の有無のところ、非行傾向有群は無群に比べて実母ありの比率が有意に多かった。これはこれまでの一連の結果と一見矛盾

するように見えるが、そうではない。実母があっても施設にあずけるのはよほどの理由が家庭にあるはずで、たとえば母親が養育の拒否や放任や虐待をするとか父親が養育拒否や虐待するなどの家庭環境の劣悪さが考えられる。あるいは、児童本人が家庭の養育機能ではどうにも手に負えない位に悪くなっている場合が考えられる。いずれにしても家庭や親のもつ養育機能の低下や劣悪化が非行傾向の発生をもたらすことが本調査の結果からいえる。

5. 親と子の人間関係と非行傾向の有無

1) 施設に入所しているわが子に対する親の接触頻度は「まったくない」が50%前後を占めているが、非行傾向有群と無群で差はなかった。親の子に対する関心も、親と子の接触と同様、非行傾向の有無と関連はなかった。

2) 父親と母親に対する児童の態度や感情は、親和的、信頼している、葛藤が強い、無関心などの順に多く、たとえどうしようもない親、自分を見放し見捨てた親であろうとも、自分と血のつながった産みの親に対する児童たちの思いの情の深さがうかがわれた。親を否定したり、無関心を装うにしろ、あるいは親を乗り越えて行くにしろ、児童たちは彼らの内面的および外面的生活の中で常に親の問題を引きずっていることを配慮して彼らの現在の生活や将来のあり方の指導をすることが大切であろう。

3) 子に対する親の養育態度は、多少放任・拒否的でめんどうみが悪く、気まぐれであり、多少愛情厚く、やさしく、おだやかな傾向をもつが、非行傾向の有群と無群で親の養育態度に明らかな差異は見い出せなかった。これは、親が施設を訪ねてくることも少なく、親の養育態度を的確に判断するほどの情報を回答者である施設職員の方々をもっておられなかったためかと考えられる。

(II) 児童本人の属性および問題行動と非行傾向の有無

1. 非行傾向の有無(非行傾向有群と非行傾向無群)とその種類

調査票のVI. 本人についての質問事項の下位項目において、過去および現在の非行・反社会的問題行動の有無を尋ねた。表I-2は過去の非行・反社会的問題行動の有無と現在の非行・反社会的問題行動の有無とのクロス集計の結果である。以下では、非行・反社会的問題行動の有無を非行傾向の有無と略記する。

表 I-2 過去および現在の非行の有無

現在の非行傾向	過去の非行傾向			人数 (行%)
	無	有	不明・無答	
無	156 (62.9)	88 (35.5)	4 (1.6)	248 (71.9)
有	4 (5.3)	68 (90.7)	3 (4.0)	75 (21.7)
不明・無答	3 (13.6)	6 (27.3)	13 (59.1)	22 (6.4)
合計	163 (47.2)	162 (47.0)	20 (5.8)	345 (100.0)

表から、有効サンプル数 345 のうち、過去に非行傾向ありが 162 人 (47.0%)、なしが 163 人 (47.2%)、不明・無答が 20 人 (5.8%) である。

現在の非行傾向の有無については、ありが 75 人 (21.7%)、なしが 248 人 (71.9%)、不明・無答が 22 人 (6.4%) である。過去の非行傾向の有無の割合と比べると、現在の非行傾向ありの割合は半数以下である。また、現在の非行傾向ありの 75 人のうち、68 人 (90.7%) は過去に非行経験があり、過去に非行経験がなく現在のみに非行傾向があるのは 4 人 (5.3%) と非常に片寄りがあるのが特徴的である。不明・無答を除いて、現在の非行傾向の有無と過去の非行傾向の有無の表について χ^2 検定を行ったところ、0.1%水準で有意差が認められた ($\chi^2 = 75.8$, $df = 1$)。それゆえ、過去の非行傾向の有無と現在の非行傾向の有無とは関連がある。すなわち、現在の非行傾向ありの児童のほとんどは過去の非行経験者であって、過去の非行未経験者は非常に少ない。同様に、過去に非行傾向がなかった児童は現在もまた非行傾向がないといえる。

ちなみに、過去の非行を行った年齢は、平均で 10.2 歳 ($N = 109$, $SD = 2.40$) である。過去の非行年齢は、過去の非行傾向有・現在の非行傾向無群と過去・現在ともに非行傾向有群において差はみられなかった。

ここで、以下の結果の表示や考察において基本的用語となる「非行傾向有群」と「非行傾向無群」の説明を行う。非行傾向有群とは、過去もしくは現在に非行傾向のある児童のすべてである。表でみると、過去に非行傾向ありの合計 162 人に現在の非行傾向ありのうちから過去・現在ともにあり (68 人) を除いた 7 人を加えた 169 人がそれにあたる。非行傾向無群とは、過去・現在ともにまったく非行傾向のない群である。表では、現在の非行傾向なしと過去に非行傾向なしとが会おうマスにあたり、その人数は 156 人である。以下、この 2 群がことあるごとくに比較対照されるが、両群の N の数は欠測値の有無の

関係で各資料ごとに多少変動することを断っておく。

次に過去と現在における非行傾向の種類について述べる。図 I-2 はその結果である。過去に非行傾向ありが 162 人、現在の非行傾向ありが 75 人であるから、各非行の種類 × 人数の総計は過去の非行傾向のほうが 326 と現在の非行の 126 人を大きく上回っているのはもちろんである。1 人当りに直すと、過去の場合が 2.0 種類、現在の場合が 1.7 種類になる。

過去の非行の種類では、盗みが非行経験者の 67.3% と群を抜いて多い。次いで嘘言 (25.9%)、無断外出 (19.8%)、無断外泊 (16.0%)、不審な金銭所持 (16.0%)、喫煙 (12.3%) などが多いほうである。現在の非行の種類では、嘘言 (37.3%) がトップで、盗み (32.0%)、反抗 (24.0%)、不審な金銭所持 (18.7%)、喫煙 (16.0%)、暴力行為 (傷害) (12.0%) が続いている。現在と過去の非行の種類を比べると、過去に比べて現在は、無断外泊、無断外出、盗みをする児童の割合が少ない。逆に割合として多くなっているのは、嘘言、反抗、暴力行為 (傷害) である。過去と現在の非行の種類のこのような変化には、児童に対する施設の処遇のあり方や非行をした時の本人の年齢が影響しているのであろうか。

2. 性別、学年、年齢と非行傾向の有無

図 I-3 は非行傾向有群と非行傾向無群それぞれの男女比構成である。この結果を非行傾向の有無と男女の性別の 2×2 分割表にして χ^2 検定を行ったところ、女子に比べて男子のほうに非行傾向が多いことがわかった ($\chi^2 = 10.95$, $df = 1$, $P < .001$)。

表 I-3 は学年と非行傾向の有無の結果である。この結果をみると、小学校 5 年生と 6 年生、中学 1 年生までは非行傾向無群が非行傾向有群に比べて多いが、中学校 2 年生と 3 年生では逆に非行傾向有群が非行傾向無群に比べて多い傾向がある。この傾向は χ^2 の $2 \times m$ 分割表の検定結果から統計的に有意であった ($\chi^2 = 18.81$, $df = 4$, $P < .001$)。常識的には、学年が進むほど非行傾向有群の比率が増すと考えられるが、中 1 において非行傾向有群の比率が小さかったのは、標本数が少なかったためかと考えられる。中 3 が他の学年と比べてきわだって非行傾向有群の比率が大きいことが注目される。

学年と年齢とはほぼ対応していると考えられるので、ここでは、非行傾向有群と無群の平均年齢を比較してみた。非行傾向有群の平均年齢は 12.7 歳 ($SD = 1.54$) で、非行傾向無群の 12.3 歳 ($SD = 1.37$) より統計的に有意に高かった ($t = 18.52$, $df = 323$, $P < .001$)。ちなみに、有効標本数 345 人全体の平均年齢は 12.5 歳 ($SD =$

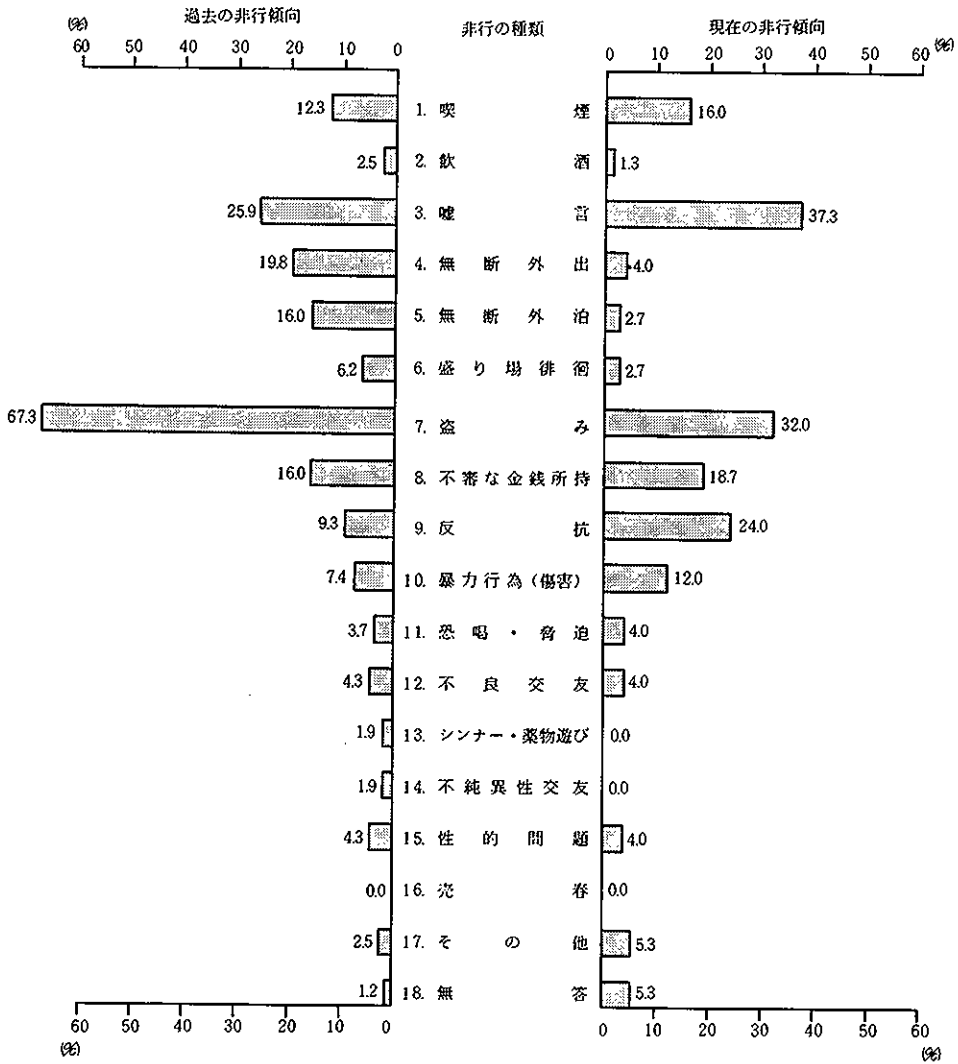


図 I - 2 過去と現在の非行の種類

表 I - 3 学年と非行傾向の有無

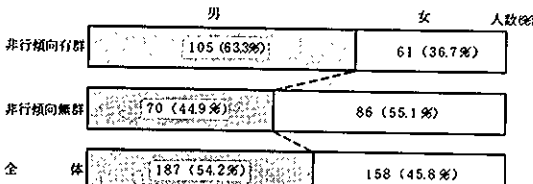


図 I - 3 性別と非行傾向の有無

グループ (Group)	学年 (Grade)					合計 (Total)
	小5 (G5)	小6 (G6)	中1 (J1)	中2 (J2)	中3 (J3)	
非行傾向有群 (Delinquency Group)	22 (46.8)	26 (45.6)	25 (36.2)	39 (53.4)	50 (71.4)	162 (51.3)
非行傾向無群 (No Delinquency Group)	25 (53.2)	31 (54.4)	44 (63.8)	34 (46.6)	20 (28.6)	154 (48.7)
合計 (Total)	47 (14.9)	57 (18.0)	69 (21.6)	73 (23.1)	70 (22.2)	316 (100.0)

・小4の1名、高1の3名及び不明・無答・欠測値は除いた

1.49)であった。その中でも、過去・現在ともに非行傾向有群（68人）の平均年齢13.0歳（SD=1.49）は他の群に比べて有意に平均年齢において高かった。

非行傾向有群の平均年齢が非行傾向無群のそれに比べて有意に高かった結果は、先に述べた。学年が進むほど非行傾向有群の割合が増すという常識的な仮説を裏づけるものである。

3. 非社会的問題行動と非行傾向の有無および種類

調査票のVI、本人についての質問事項の下位項目において、過去および現在の非社会的問題行動の有無を尋ねた。表I-4と表I-5は、それらの有無と非行傾向の有無のクロス集計表である。

表I-4 過去の非社会的問題行動と非行傾向の有無

過去の非社会的問題行動 グループ	人数 (列%)			
	無	有	不明・無答	合計
非行傾向有群	54 (34.6)	101 (69.2)	10 (55.6)	165 (51.6)
非行傾向無群	102 (65.4)	45 (30.8)	8 (44.4)	155 (48.4)
合計	156 (48.8)	146 (45.6)	18 (5.6)	320 (100.0)

表I-5 現在の非社会的問題行動と非行傾向の有無

現在の非社会的問題行動 グループ	人数 (列%)			
	無	有	不明・無答	合計
非行傾向有群	88 (42.1)	73 (70.9)	4 (50.0)	165 (51.6)
非行傾向無群	121 (57.9)	30 (29.1)	4 (50.0)	155 (48.4)
合計	209 (65.3)	103 (32.2)	8 (2.5)	320 (100.0)

表I-4の内から不明・無答を除いた2×2分割表の χ^2 検定では、非行傾向有群と非行傾向無群の人数の比が過去の非社会的問題行動の有無の違いによって異なることが0.1%水準で有意であった($\chi^2=36.06, df=1$)。同様な傾向は、表I-5の現在の非社会的問題行動の有無と非行傾向の有無の間にもみられた($\chi^2=22.86, df=1, P<.001$)。結果から、非社会的問題行動ありの児童は非行傾向ありを示す割合が大きく、非社会的問題行動なしの児童は反対に非行傾向ありを示す割合が小さいことがわかった。

なお、過去の非社会的問題行動をおこした平均年齢は8.9歳(N=87, SD=4.11)である。非行傾向有群と無群の間、あるいは現在の非行傾向有群と無群の間に統計的に明らかな差はない。

次に、過去および現在の非社会的問題行動の種類についてみると図I-4のような結果となった。各種類の人数比は過去と現在の間で大差はなく同じような分布傾向を示している。非社会的問題行動の種類では、情緒不安定、ひねくれ、無気力、強い劣等感、逃避的傾向といった性格特徴を示す児童が多い。また、偏食、自慰、性器いじり、指しゃぶりといった神経性習癖、登校拒否、場面緘黙なども目立つ。

非社会的問題行動の種類の特徴を非行傾向有群についてみると、性格特徴としては情緒不安定、ひねくれ、無気力、強い劣等感、逃避的傾向を、問題行動としては偏食、登校拒否、自慰・性器いじり、指しゃぶりを示す場合が多い。

以上のように、非行問題の有無と非社会的問題行動の有無とは関連が深く、非行傾向をもつ児童は同時に非社会的問題行動や非社会的性格特徴も合わせもつ場合が多いことがわかった。一般に、非行や反社会的問題行動は欲求不満や攻撃性が自己以外の対象である人や物や社会に向けられた結果であり、非社会的問題行動はそれらが内向して自己に向けられた結果と解釈される。今回の結果をみると、何らかの問題をもつ児童は、自己の欲求不満や攻撃性を自己および社会の両方向に同時に向けて出すことが多いと言える。そのような重複した問題行動を示す児童がいる一方、非行傾向も非社会的問題行動も示さない健全な児童も多い。その割合は過去において33.8%、現在においては38.8%を占めている。その他、非行傾向のみありの群と非社会的問題傾向のみありの群については表I-4、表I-5を参照していただきたい。

4. 知能段階および心身発達上の問題と非行傾向の有無

図I-5は知能段階と非行傾向の有無の結果である。 χ^2 検定の結果、知能段階の高低によって非行傾向の有無の人数比が変わらないことが明らかとなった。つまり、知能が低い児童には非行が多いとか、知能が高い児童には非行が少ないなどの明らかな傾向はみられなかった。知能段階がどの場合においても、非行傾向の有無はほぼ50%ずつの傾向を示している。

心身発達上の問題をもつ児童は全部で全体の8.7%であった。非行傾向有群では11.4%で、非行傾向無群の7.1

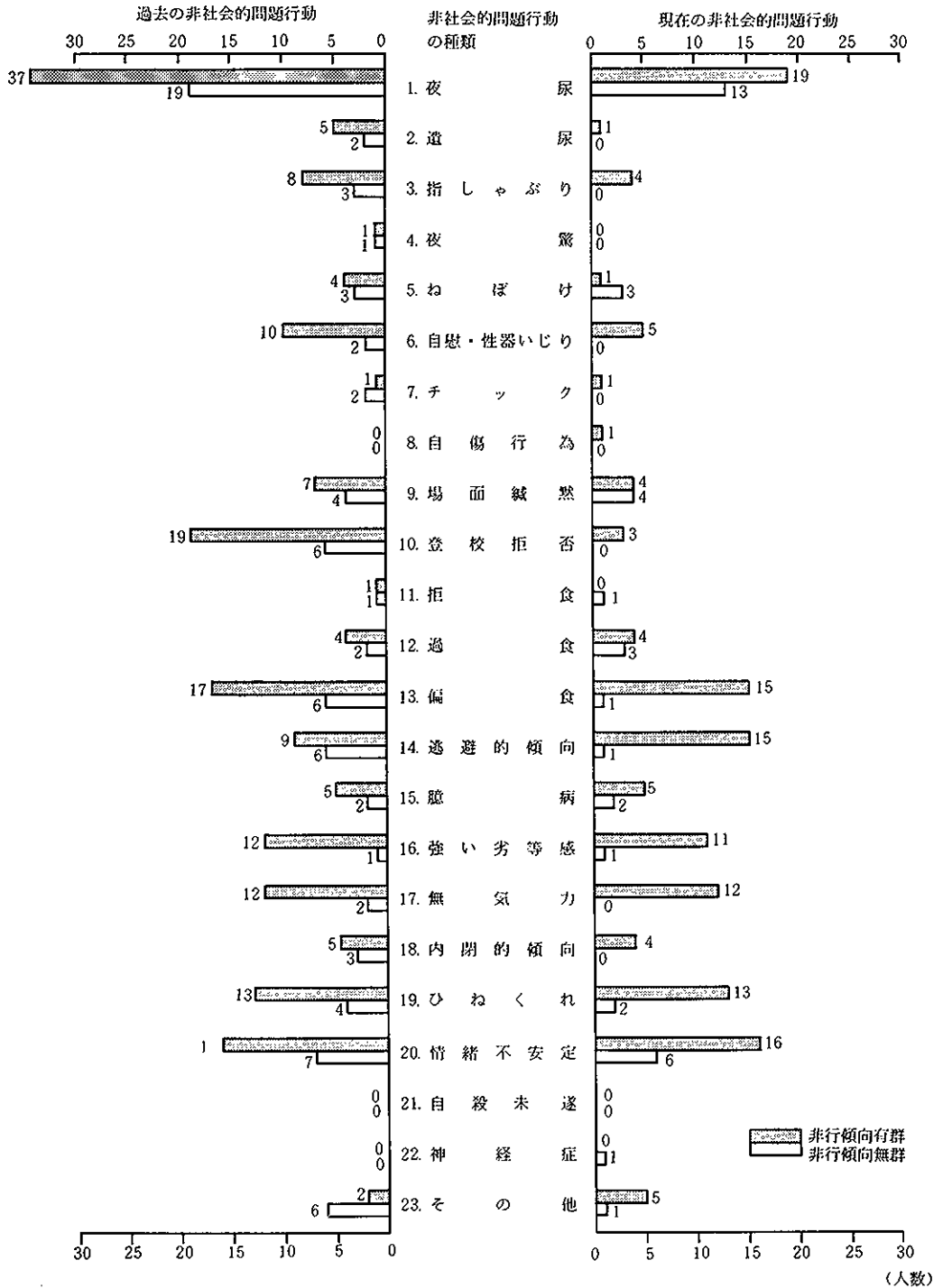


図 I - 4 非社会的問題行動の種類と非行傾向の有無

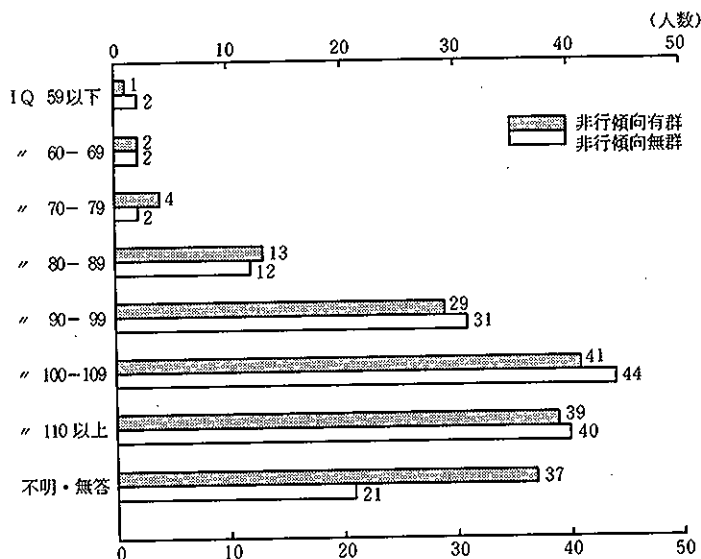


図 I-5 知能段階と非行傾向の有無

よりも心身発達上の問題をもつ児童の割合が大きかったが、 χ^2 検定は有意ではなかった。つまり、心身発達上の問題のある、なしにかかわらず、非行傾向の有無の人数比に明らかなちがいはなかった。

心身発達上の問題の種類において指摘されたものでは、精神発達遅滞7人、身体発育の遅れ5人、てんかんと脳波異常が3人ずつなどが主なものである。

5. 学校への適応と非行傾向の有無

表 I-6 は小学校時の学業成績と非行傾向の有無の結果である。表 I-7 は中学校時の学業成績と非行傾向の有無の結果である。2つの表から、非行傾向有群の比は学業成績が良好から不良の方向に段階が進むにつれて増大していることがわかる。逆に、非行傾向無群の比は学業成績が良好から不良になるにつれて減少している。このような傾向は、0.1%水準で5つの学業成績段階が非行傾向の有無において同じ割合を示さないといえることから統計的に裏づけられる（不明・無答を除いた χ^2 検定、小学校の学業成績では $\chi^2 = 40.64$, $df = 4$, 中学校の学業成績では $\chi^2 = 22.51$, $df = 4$ ）。

勉強のできる児童で非行傾向のあるものは少なく、勉強のできない児童で非行傾向のあるものは多い傾向が明確である。先に述べた知能段階と非行傾向の有無はまったく無関係であったが、学業成績と非行傾向の有無には深い関係があることがわかった。一般的には、知能は環境の影響を受ける割合が比較的小さいのに対して、学業成績は環境に左右される割合が大きいといわれている。生

育環境の影響が非行傾向の有無と学業成績の良否に深くかわり、両者を関係づけていると考えられる。あるいは、学業成績が思わしくないことやそれから派生する2次的原因から非行に走る。逆に非行や遊びを覚えた結果勉強に身が入らず学業成績が悪化したとも考えられよう。恐らくいずれの推論も当てはまる余地があると思われるが、しかし、この結果からは、上述したような因果関係は知り得ない。ただ言えることは、学業成績の良否は非行傾向の有無と深い関係があるということである。

両群を合計した全体の傾向をみると、小学校、中学校ともに学業成績良好の児童の割合は小さく（小学校の良好とどちらかというと良好を合わせて17.6%、同じく中学校11.7%）、逆に学業成績不良の児童の割合が大きい（小学校の不良とどちらかという不良を合わせて47.8%、同じく中学校64.4%）。とくに中学生の児童の学業成績には問題が多い。この問題は、次の学校生活での問題の中で学力不振として問題視されている。

表 I-8 は学校生活での問題行動と非行傾向の有無の結果である。結果から、学校生活での問題行動をもつ児童には非行傾向ありの割合が高く、逆に学校生活で問題行動を示さない児童には非行傾向ありの割合が低いといえる（不明・無答を除いた $\chi^2 = 35.85$, $df = 1$, $P < .001$ ）。つまり、学校生活での問題行動の有無は非行の有無と関連性が大きい。

ところで、学校生活での問題がある場合、その問題行動の種類をうかがったところ（図 I-6参照）、非行傾向有群と無群を合わせた全体で多いのは、学力不振（全体

表 I - 6 小学校時の学業成績と非行傾向の有無

学業成績 グループ	学業成績						人数 (列%)
	良好	どちらかとい うと良好	普通	どちらかとい うと不良	不良	不明・無答	合計
非行傾向有群	4 (26.7)	15 (36.6)	45 (46.4)	52 (52.5)	40 (75.5)	8 (61.5)	164 (51.6)
非行傾向無群	11 (73.3)	26 (63.4)	52 (53.6)	47 (47.5)	13 (24.5)	5 (38.5)	154 (48.4)
合計	15 (4.7)	41 (12.9)	97 (30.5)	99 (31.1)	53 (16.7)	13 (4.1)	318 (100.0)

表 I - 7 中学校時の学業成績と非行傾向の有無

学業成績 グループ	学業成績						人数 (列%)
	良好	どちらかとい うと良好	普通	どちらかとい うと不良	不良	不明・無答	合計
非行傾向有群	3 (33.3)	3 (23.1)	16 (42.1)	42 (61.8)	40 (75.5)	2 (28.6)	106 (56.4)
非行傾向無群	6 (66.7)	10 (76.9)	22 (57.9)	26 (38.2)	13 (24.5)	5 (71.4)	82 (43.6)
合計	9 (4.8)	13 (6.9)	38 (20.2)	68 (36.2)	53 (28.2)	7 (3.7)	188 (100.0)

表 I - 8 学校生活での問題行動
と非行傾向の有無

学校生活での 問題行動 グループ	人数 (列%)			
	無	有	不明・無答	合計
非行傾向有群	75 (39.1)	88 (73.9)	5 (50.0)	168 (52.3)
非行傾向無群	117 (60.9)	31 (26.1)	5 (50.0)	153 (47.7)
合計	192 (59.8)	119 (37.1)	10 (3.1)	321 (100.0)

の22.4%)、校則違反をする(6.5%)、孤立(5.3%)、いじめをする(5.0%)、学友とトラブルがある(4.7%)、遅刻(4.0%)、いじめられる(3.7%)、無断欠席(3.4%)の順となっている。学力不振がきわだって多いが、この結果は先にとりあげた学業成績の不良の結果(小学生16.7%、中学生28.2%)と対応する。

非行傾向有群は学校生活での問題行動ありの73.9%を占め、非行傾向無群の26.1%と比べる圧倒的な人数であ

る。それゆえ、問題行動の各種類の人数にも非行傾向有群が無群に比べて格段の違いがある。それを勘案しながら非行傾向有群が無群に比べて多く示す問題行動をあげると、学力不振、遅刻、無断欠席などの勉学態度の問題、校則違反をする、学友とトラブルがあるなどの攻撃的な生活態度の問題となる。以上の種類の問題が非行傾向有群に特徴的であるが、数だけからいくと、孤立、いじめをする、教師とのトラブルがある、いじめられるも多い。

(Ⅲ) 施設歴と非行傾向の有無

1. 施設入所時年齢と非行傾向の有無

調査時点で生活している施設への入所時の平均年齢は、345人全体では7.3歳(SD=3.41)である。非行傾向有群で7.4歳(SD=3.54)、非行傾向無群で7.2歳(SD=3.37)で入所時年齢に明らかな差はない。

現在の施設への入所時年齢を年齢段階別にみると、全体では、

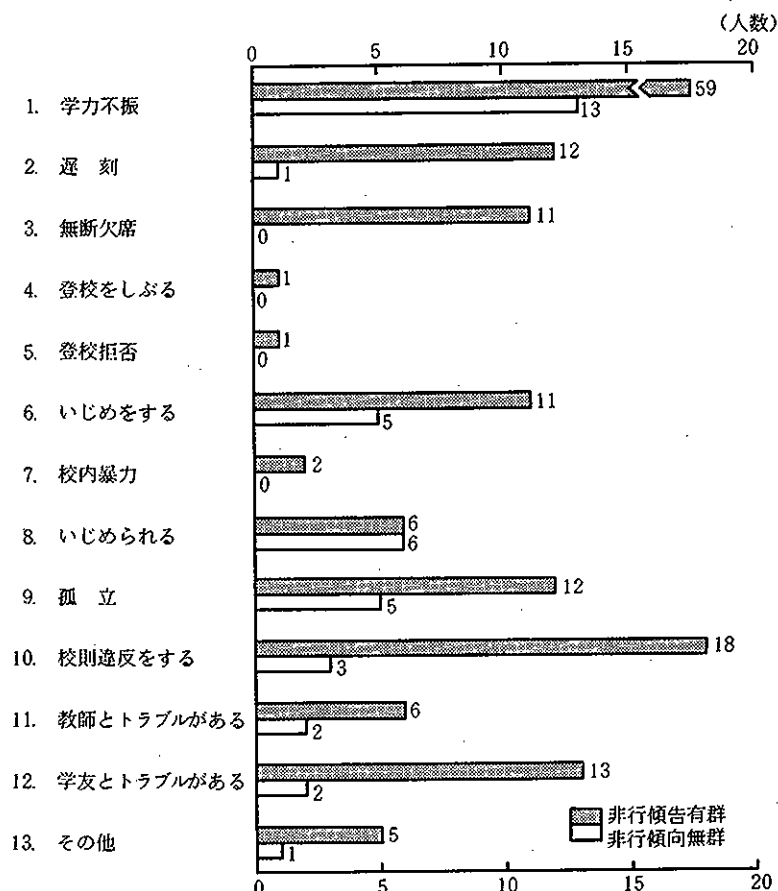


図 I - 6 学校生活での問題行動の種類と非行傾向の有無

0 - 1 歳未満	1 人	0.3 %
1 - 4 歳	55 人	15.9 %
4 - 7 歳	107 人	31.0 %
7 - 10 歳	82 人	23.8 %
10 - 13 歳	72 人	20.9 %
13 - 17 歳	28 人	8.1 %

となっている。平均年齢の場合と同様に、年齢ごとの人数分布傾向についても非行傾向有群と非行傾向無群の間に違いはなく、両群とも全体の年齢分布傾向とほとんど同じであった。

2. 施設入所理由と非行傾向の有無

表 I - 9 は施設入所理由と非行傾向の有無を表わしている。8 つの施設入所理由における非行傾向の有無の比が互いに異なっていることがわかる。非行傾向無群と比べて非行傾向有群に多くみられる施設入所理由は、本人の問題行動、遺棄、養育拒否、虐待である。施設に入所し

ている児童はそれぞれ厳しい生育歴や家庭環境を体験してきているが、非行傾向有群の児童たちの家庭環境はその中でも苛酷なものであることがうかがわれる。親や周囲の人々から拒否され、見放され、にくしみや攻撃の対象となり、親や大人のエゴから生じた欲求不満の解消手段としての役割を荷なってきたと考えられる。施設入所理由のうちの本人の問題行動とは、暴力行為や家出放浪など親や養育者にとって手におえない行動を頻繁に示すために親などが養育不能に陥るような問題行動である。

非行傾向有群と比べて非行傾向無群に多くみられる施設入所理由はほとんどないが、しいてあげれば養育困難と親の精神病である。非行傾向有群のシビアな施設入所理由と比べるとマイルドである。

3. 施設在所期間と非行傾向の有無

現在の施設での平均在所期間は全体で 5.4 年 (SD = 3.49) である。非行傾向有群のそれは 5.5 年 (SD = 3.61)、

表 I-9 施設入所理由と非行傾向の有無

施設入所理由	グループ		人数 (列%)
	非行傾向有群	非行傾向無群	
1. 養育困難	88 (46.1)	103 (53.9)	191
2. 親の精神病	28 (46.7)	32 (53.3)	60
3. 遺棄	4 (66.7)	2 (33.3)	6
4. 養育放任	26 (50.0)	26 (50.0)	52
5. 養育拒否	13 (61.9)	8 (38.1)	21
6. 本人の問題行動	29 (87.9)	4 (12.1)	33
7. 虐待	6 (60.0)	4 (40.0)	10
8. 家庭環境の不良	3 (50.0)	3 (50.0)	6
合計	197 (52.0)	182 (48.0)	379 (100.0)

・合計が345を上まわるのは重複回答があるため

非行傾向無群のそれは5.3年(3.42)で、両群の平均在所期間に差はみられなかった。

また、施設在所期間を段階分けして人数の分布をみると、全体では、

0-3年未満	90人	28.1%
3-6年 "	75人	23.4%
6-9年 "	92人	28.8%
9-12年 "	49人	15.3%
12-15年 "	14人	4.4%

となっている。これを非行傾向有群と無群に分けて分布状態をみたが、両群ともに全体の分布パターンと同じであり違いはみられなかった。

表 I-10 他施設での在所経歴の有無と非行傾向の有無

グループ	他施設での在所経歴		人数 (列%)
	無	有	
非行傾向有群	104 (48.6)	62 (57.9)	166 (51.7)
非行傾向無群	110 (51.4)	45 (42.1)	155 (48.3)
合計	214 (66.7)	107 (33.3)	321 (100.0)

4. 他施設での在所経歴と非行傾向の有無

表 I-10は他施設での在所経歴の有無と非行傾向の有無の関係を示している。表から、他施設での在所経歴がある場合は非行傾向有が多少多く、他施設での在所経歴がない場合は非行傾向無がほんのわずか多いが、統計的に有意ではなかった。つまり、結果から、他施設での在所経歴の有無は非行傾向の有無と関係があるとはいえない。

5. 現在までの通算在所期間と非行傾向の有無

345人全体の現在までの通算在所期間の平均は6.4年(SD=4.09)である。非行傾向有群のそれは6.6年(SD=4.20)、非行傾向無群のそれは6.2年(SD=4.04)であるが、両群間に有意差はみられなかった。

在所期間の長さを段階ごとに人数分布を求めると、全体で、

0.0-2.5年未満	74人	23.1%
2.5-5.0年 "	52人	16.3%
5.0-7.5年 "	67人	20.9%
7.5-10.0年 "	49人	15.3%
10.0-12.5年 "	51人	15.9%
12.5-15.0年 "	21人	6.6%
15.0-17.5年 "	6人	1.9%

となっている。15.0-17.5年未満の段階の6人はすべて非行傾向有群の児童であったが、非行傾向有群と無群の間には人数分布のパターンに大差はなかった。

在所した施設数が多いほど、あるいは施設生活が長くなればなるほど非行の可能性は増大するのではないかという仮説をもっていたが、結果はそうではなかった。結果からは、施設生活によって非行の発生が予防されるとも言えないが、しかし少なくとも施設経験の長さに応じて非行傾向が醸成されるという仮説は否定された。

これをもう少し解釈すれば、非行や反社会的な問題行動は児童の劣等感や攻撃性や欲求不満の外向化、アクティング・アウトに他ならないが、施設の管理体制が児童を縛ってしまって、それらの内面的な問題が外に向かって表現されず、抑圧され内向化しているとも考えられる。というのは、先に述べた結果の非社会的問題行動が調査時点で32.2%と多かったからである。思春期を生きている調査対象の児童たちは、当然悩みや問題を抱えていると思われるが、その内面生活の問題を社会という開かれた場につけるよりも、自己の中に抱え込み抑え込んでしまっている可能性がある。もしそれが事実とすれば、彼らの悩みを自らをして語らしめるような人間的接触や

雰囲気づくりが要請される。

6. 最初の施設入所時年齢と非行傾向の有無

最初の施設入所時年齢の平均は、全体で6.4歳（SD=6.68）であり、入所時年齢のばらつきが大きい。非行傾向有群のそれは6.2歳（SD=5.86）で、非行傾向無群の6.7歳（SD=7.63）よりも0.5歳ほど幼いがその差は統計的に有意ではなかった。つまり、最初の施設への入所年齢の高低は非行傾向の有無と明確な関連性をもっていなかった。

そのことは、次の年齢段階別の結果からも明らかである。

0-1歳未満	36人	11.3%
1-4歳 "	58人	18.2%
4-7歳 "	84人	26.3%
7-10歳 "	71人	22.3%
10-13歳 "	53人	16.6%
13-17歳 "	17人	5.3%

以上の全体の結果をみると、4-7歳未満の幼児期が26.3%と最も多く、ついで7-10歳未満の小学校低学年、1-4歳未満の幼児期となっている。このような分布パターンは、非行傾向有群と無群でまったく違いはみられなかった。

われわれは、通算施設経歴の長さと同様に、施設への入所が低年齢であればあるほどそれが児童に与えるインパクトは大きく、何らかの問題行動が児童に発生しやすいのではないかと仮説した。しかし、通算施設経歴の長さの場合と同様、最初の施設への入所年齢の高低と非行傾向の有無との間に明らかな関連性は見い出せなかった。

7. 最初の施設の種別と非行傾向の有無

全体の結果について述べると、最初の施設が乳児院の場合が67人（20.9%）、養護施設が242人（75.7%）、里親が2人（0.6%）、その他9人（2.8%）であった。この分布パターンに非行傾向有群と無群で差は見られなかった。この結果は前述の最初の施設への入所年齢と一致する。

8. 通算在所施設数と非行傾向の有無

表I-11は通算在所施設数と非行傾向の有無の関係を示すクロス集計表である。通算在所施設数が増すに従って非行傾向有群の比が増える傾向がみてとれるが、表の結果を χ^2 検定した結果、4種類の通算在所施設数における非行傾向の有無の比はお互いに異なるとはいえなかった。この結果は他施設での在所経歴の有無の結果と符

表I-11 通算在所施設と非行傾向の有無

通算在所施設数	人数 (例数)				
	1か所	2か所	3か所	4か所	合計
非行傾向有群	105 (48.4)	41 (54.7)	16 (64.0)	4 (80.0)	166 (51.6)
非行傾向無群	112 (51.6)	34 (45.3)	9 (36.0)	1 (20.0)	156 (48.4)
合計	217 (67.3)	75 (23.3)	25 (7.8)	5 (1.6)	322 (100.0)

合する。

(IV) 家庭環境と非行傾向の有無

1. 実父実母の有無と非行傾向の有無

実父の有無に関する全体の結果は、実父の欠損無が56.3%、欠損有が43.7%（死別9.4%、生別34.3%）であった。これを非行傾向有群と無群の分布パターンで比較したが、両群ともに全体の分布パターンとほとんど同じで差がなかった。欠損無、死別、生別の場合もまったく同様で違いがみられなかった。

実母の有無に関する全体の結果は、実母の欠損無が34.1%、欠損有が65.9%（死別14.2%、生別51.7%）であった。これを非行傾向有群と無群で比較したところ、非行傾向有群の欠損無（37.2%）は非行傾向無群の欠損無（30.7%）よりも統計的に有意に多かった（ $\chi^2=12.14$, $df=1$, $P<.001$ ）。言いかえれば、非行傾向有群のほうが非行傾向無群よりも実母の欠損が少ないといえる。欠損無、死別、生別の分布パターンを同様に検討したが差はみられず、実母の有無と非行傾向の有無は関係があるが、死別か生別かと非行傾向の有無とは関連がなかった。

実父と実母それぞれの有と無の比を比較すると、欠損無の比率は実母（34.1%）よりも実父（56.3%）のほうが明らかに多い（ $\chi^2=31.69$, $df=1$, $P<.001$ ）。つまり、施設の児童には父親がいない場合よりも母親がいない場合のほうが多い。考えればこれは当然のことで、父親は仕事をもっているなどの関係から母親がいないれば子どもの養育はままならず、結果として施設に入所せざるを得なくなる。母親の場合は父親がいないでも子どもの養育が可能である場合が多く施設にあずけることが少ない。ゆえに、施設の児童には父親欠損有の子が多く、母親欠損無の子が少ないと考えられる。

2. 実父実母の生別の理由と非行傾向の有無

実父との生別の理由は、全体（115人）では離婚が40%、行方不明が41.7%、その他18.3%で、非行傾向有群と無群に生別の理由の違いはみられなかった。母親の場合（172人）は、離婚58.7%、行方不明33.1%、その他8.2%で、同様に両群の生別の理由に違いはみられなかった。

父親の場合と母親の場合で生別の理由を比較すると、母親（58.7%）のほうが父親（40.0%）よりも離婚が多く、行方不明が少なかった（ $\chi^2 = 5.45$, $df = 1$, $P < .05$ ）、つまり、母親の欠損の理由は離婚が多く、父親の場合は離婚と行方不明が同じ位の比率である。

3. 実父実母の欠損の時期と非行傾向の有無

実父の欠損の時期は平均で5.5歳（ $N = 130$, $SD = 4.69$ ）である。非行傾向有群の場合は4.8歳（ $SD = 4.22$ ）であり、非行傾向無群の6.2歳（ $SD = 5.26$ ）よりも幼い時期に実父が欠損しているがこの差は統計的に有意ではなかった。

それを年齢段階別に表わすと、

0 - 1歳未満	25人	20.5%
1 - 4歳	26人	21.3%
4 - 7歳	22人	18.0%
7 - 10歳	24人	19.7%
10 - 13歳	18人	14.8%
13 - 17歳	7人	5.7%

となる。年齢段階別の欠損の時期を非行傾向有群と無群で比較したが明らかな違いはみられなかった。

以上の結果から、実父の欠損の時期が早いか遅いかと非行傾向の有無とが関連する傾向は見い出せなかった。

次の実母の欠損の時期についてみると、全体（196人）では平均年齢が5.4歳（ $SD = 5.98$ ）であった。非行傾向有群ではそれが4.6歳（ $SD = 5.79$ ）と非行傾向無群の6.2歳よりも幼いが、その違いは統計的に有意ではなかった。年齢段階別にみると、全体では、

0 - 1歳	20人	11.4%
1 - 4歳	53人	30.3%
4 - 7歳	51人	29.2%
7 - 10歳	27人	15.4%
10 - 13歳	21人	12.0%
13 - 17歳	3人	1.7%

となっている。これを非行傾向有群と無群とで比べると、非行傾向有群は無群に比べ実母の欠損が幼い時期である場合が多く、長じての欠損は無群よりも少ない（ $\chi^2 = 30.95$, $df = 5$, $P < .001$ ）。

つまり、実父の欠損の時期と非行傾向の有無とは関連

がないが、実母の欠損の時期と非行傾向の有無とは関連があり、実母を幼くして失った児童は非行や反社会的行動を起こしやすいことがわかった。

なお、実父（5.5歳）と実母（5.5歳）の欠損の時期の平均年齢はほぼ同じであった。

4. 実父実母の職業と非行傾向の有無

実父の職業で多かったのは一般的職務であり（42.3%）、続いて自営業7.3%、無職5.7%などであった。母親の場合は無職31.8%、一般的職務11.6%、パートタイム9.3%などであった。実父実母の場合ともに、非行傾向有群と無群で職業に特徴的な違いはみられなかった。

5. 実父実母の問題点と非行傾向の有無

表I-7は実父および実母の問題点のそれぞれを非行傾向有群と無群に分けて表わしたものである（度数がきわめて少ない問題点の種類は省略してある）。

実父の場合、養育放任、サラ金、親として未成熟、酒乱・アル中、ギャンブル狂、病気療養中、養育拒否、異性問題、犯罪者などが問題点として多くあげられている。また問題点無は全体の18.2%であった。非行傾向有群と無群間で問題点の各種類の比に差がみられるかどうかを臨界比（CR）で両側検定したところ、非行傾向有群の実父の問題点で酒乱・アル中、ギャンブル狂、ヤクザが非行傾向無群の実父のそれよりも有意に多いことがわかった。同様に、非行傾向無群の実父は有群の実父よりも問題点なしが有意に多かった。その他の問題点も両群で違いがみられるが、その差は有意ではなかった。

実母で多い問題点は、養育放任、異性問題、親として未成熟、精神病、養育拒否、病気療養中、サラ金などである。問題点なしは全体の10.1%であった。非行傾向有群と無群の間で先と同様に検定を行ったところ、非行傾向無群の実母のほうが有群の実母よりもサラ金問題を多くもっていることがわかった。問題点なしも含めたそれ以外のすべての種類に両群間で有意な差はみられなかった。

以上の結果をまとめると、非行傾向の有無は実母の持っている（あるいは持っていた）問題点よりも実父の持っている（あるいは持っていた）問題点と結びつきが強いといえる。たとえば、非行傾向有の児童の実父に問題点を持つ人が多く、逆に非行傾向無の児童の実父には問題点を持つ人が少ない傾向がある。

6. 主な養育者と非行傾向の有無

まず各時期について主な養育者は誰であったかをみて

石井他：年少非行に関する研究（第5報）

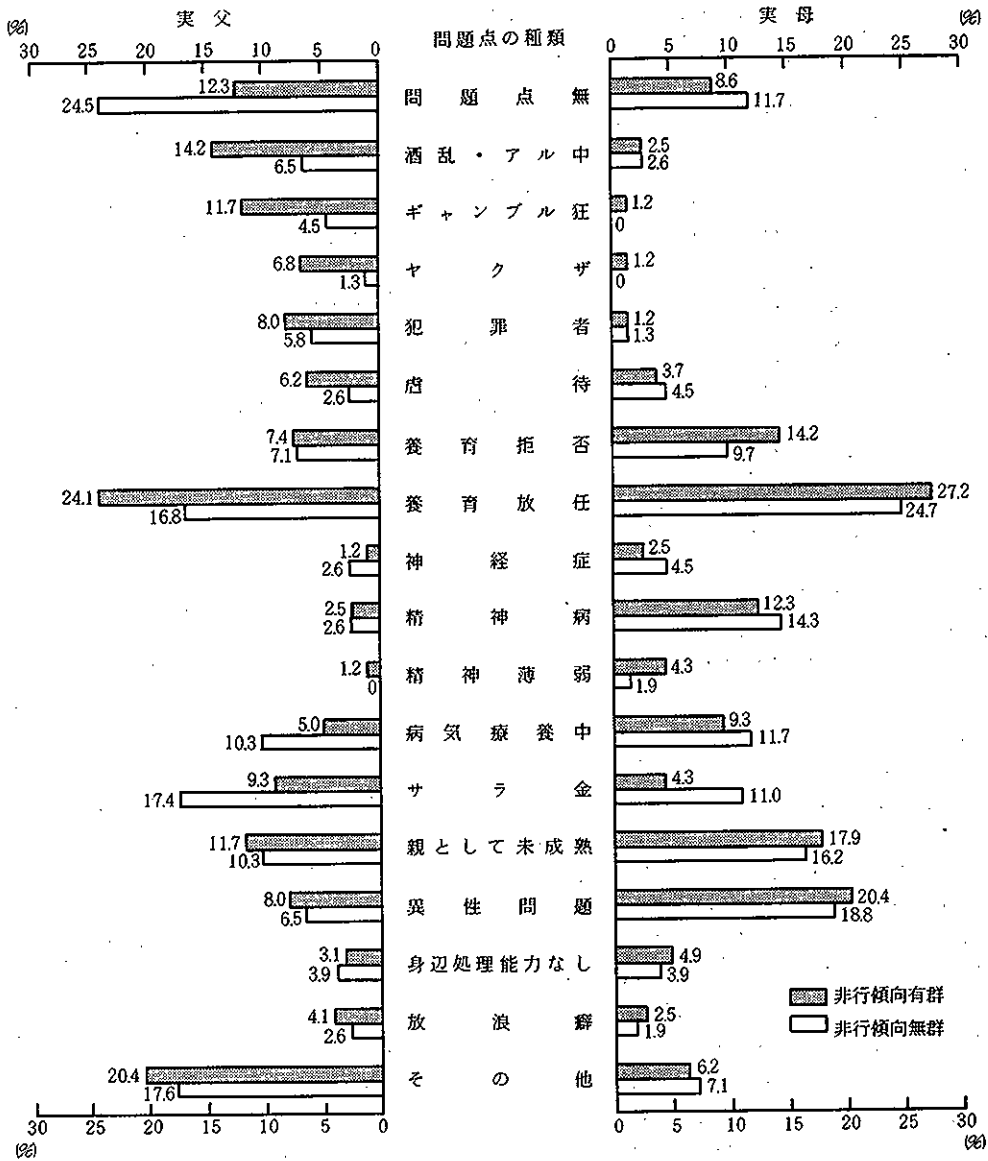


図1-7 実父実母の問題点と非行傾向の有無

みたい。乳児期は実父実母（62.1%）がもっとも多く、次いで保護養護施設（16.1%）、実母（11.7%）、祖父母（4.4%）、実父（4.1%）の順となっている。幼児期では保護養護施設（37.5%）がトップで、実父実母（31.5%）、実母（12.3%）、実父（7.9%）、祖父母（5.7%）、実継父母（4.4%）と続いている。小学校の時期は保護養護施設（78.2%）が当然増加し、実父実母（9.8%）、実父（9.2%）、実母（9.2%）などを大きく上回っている。中学校の時期ではその傾向がもっと顕著である。

小学校・中学校の時期は保護養護施設の児童が大部分であり、非行傾向有群と無群で主な養育者に違いはみられない。そこで乳児期と幼児期のみについて主な養育者の内訳を非行傾向有群と無群に分けて表わした。表1-12がその結果である。乳児期の場合、両群の間に特徴的な差異はみられないが、臨界比（CR）の両側検定の結果、主な養育者としての実父が非行傾向有群が無群に比べて有意に多かった。それ以外に両群間で顕著な差はなかった。同様に幼児期についてみると、主な養育者とし

表 I-12 乳児期と幼児期における主な養育者

養育者	乳 児 期		幼 児 期	
	非行傾向有群	非行傾向無群	非行傾向有群	非行傾向無群
実 父 実 母	92 (56.8)	105 (67.7)	39 (24.1)	61 (39.4)
実 父	10 (2.2)	3 (1.9)	14 (8.6)	11 (7.1)
実 母	17 (10.5)	20 (12.9)	21 (13.0)	18 (11.6)
実 継 父 母	1 (0.6)	2 (1.3)	8 (4.9)	6 (3.9)
祖 父 母	9 (5.6)	5 (3.2)	12 (7.4)	6 (3.9)
養 父 母	1 (0.6)	1 (0.6)	3 (1.9)	0 (0.0)
その他の親族	3 (1.9)	0 (0.0)	4 (2.5)	1 (0.6)
保護養護施設	30 (18.5)	21 (13.5)	63 (38.9)	56 (36.1)
養育者が転々	4 (2.2)	0 (0.0)	4 (2.5)	2 (1.3)

- ・パーセントの数字は、各群の総人数に対する比率である。
- ・重複回答があるため100%を越える。

て実父実母が非行傾向無群が有群に比べて有意に多かった。それ以外に顕著な差はみられなかった。

以上の結果から、当然かも知れないが幼い時期ほど実父実母に養育される割合が高く、長ずるに従って保護養護施設が急激に増えていくことがわかる。非行傾向の有無と主な養育者の関係についてみると、両群比較で乳児期には非行傾向有群に実父が多く、幼児期で非行傾向無群に実父実母が多かった。乳児期の養育に実父があたるということは、実母の養育機能の欠如を意味する。非行傾向有群は無群と比べて実母の養育機能の欠如が多く、また同様に幼児期においても有群は無群に比べ実父実母の養育機能の欠如が顕著であった。このことは、幼少期における実父実母の養育機能の欠如が非行傾向の発生をもたらすというわれわれの当初の仮説が支持されたことになる。とくにその中でも幼少期における母親の養育機能の非行防止に果す役割は非常に大きいといえよう。その裏づけとして、先の実母の欠損時期と非行傾向の有無において、母親の欠損時期が幼い時ほど非行傾向を示しているケースが多かったことがあげられる。

7. 家庭の生活程度、生活保護受給の有無と非行傾向の有無

家庭の経済状態と非行傾向の有無について調べた。全体の生活態度は、富裕1.6%、普通37.2%、貧困24.9%、養扶助17.4%、不明・無答18.9%であった。この分布の比率は非行傾向有群と無群の間で差はみられなかった。

生活保護受給の状況は、全体で「受けている」が20.8%、「受けていない」が67.7%、無答11.5%であった。

生活程度の場合と同様、非行傾向有群と無群の間に差はみられなかった。

以上の結果から、家庭の経済状態と非行傾向の有無に関連があるとはいえない。

(V) 親と子の人間関係と非行傾向の有無

1. 親と子の接触と非行傾向の有無

施設に入所しているわが子に対する親の接触頻度について尋ねた。その結果、父親と母親それぞれの場合、

	父親	母親
1. 「まったくない」	48.3%	62.8%
2. 「ほとんどない(年に1,2回位)」	17.6%	8.2%
3. 「たまにある(年に5,6回位)」	11.9%	9.9%
4. 「ときどきある(月に1回位)」	19.6%	17.7%
5. 「たびたびある(週に1回位)」	2.6%	1.4%

であった。全体では父親よりも母親のほうが「まったくない」が多い。「ほとんどない」は父親に多い。しかし、父親との接触および母親との接触それぞれについて、非行傾向有群と無群とで比較すると両群ともに全体の分布パターンと似ていて違いがみられなかった。

つまり、親の子に対する接触頻度と非行傾向の有無とは関連性があるとはいえない。

2. 親の子に対する関心と非行傾向の有無

施設に入所しているわが子に対する親の関心の程度を尋ねた。前述の親と子の接触がもつ意味と質問の意味は

同類である。全体の結果は、

	父親	母親
1.「低い」	23.0%	29.6%
2.「低いほうである」	19.1%	18.2%
3.「普通」	30.4%	23.9%
4.「高いほうである」	19.1%	22.0%
5.「高い」	8.4%	6.3%

であった。父親と母親で大きな差はない。これを非行傾向有群と無群と比較しても、父親、母親の場合ともに違いはなかった。

以上の結果から、親の子に対する関心は、親と子の接触と同様、非行傾向の有無と関連があるとはいえない。

3. 親に対する児童の態度と非行傾向の有無

この問題では、親に対して児童はどのような態度や感情を示しているかを探ねた。その結果、全体で次のような結果になった。

	父親に対して	母親に対して
1.親和的	28.2%	19.6%
2.信頼している	26.5%	11.4%

3.無関心	6.5%	5.7%
4.冷淡	1.2%	1.2%
5.葛藤が強い	8.6%	10.2%
6.拒否的	4.1%	2.0%
7.憎悪感が強い	0.8%	1.6%
8.はっきりわからない	14.7%	18.4%

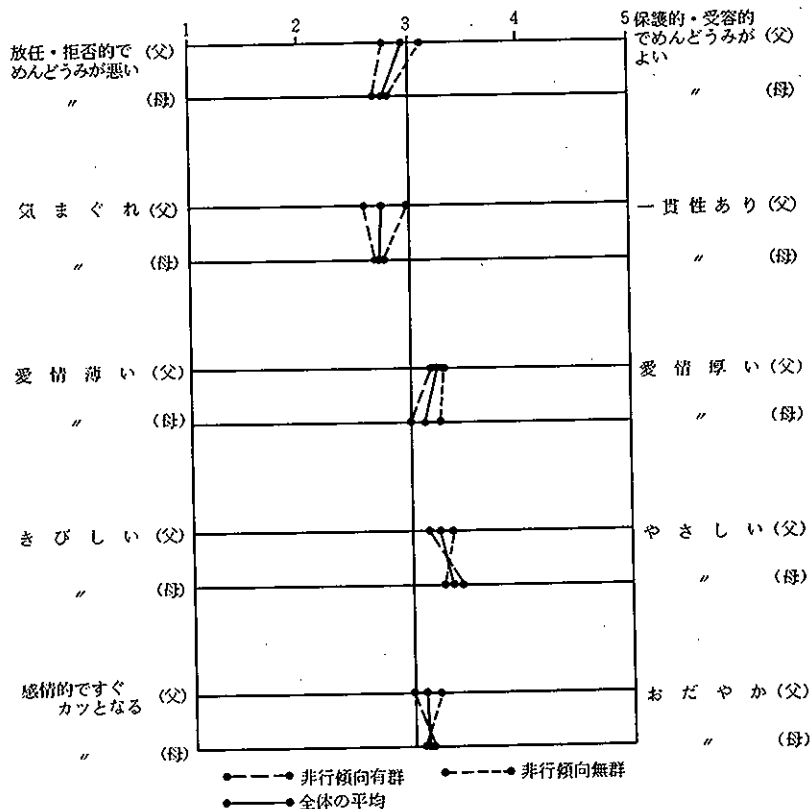
結果には無回答その他は省略されている。父親と母親に対する児童の態度や感情は、親和的、信頼している、葛藤が強い、無関心などの順に多く、親に対する児童たちの思いの丈の深さがうかがわれる。

非行傾向の有群と無群の間に差はみられず、全体の場合の結果と同じ分布パターンをそれぞれが示している。

4. 子に対する親の養育態度と非行傾向の有無

図I-8は子に対する親の養育態度の質問項目の結果を非行傾向有群と無群、全体の平均によって表わしたものである。

非行傾向有群の父親の養育態度は、非行傾向無群の父親のそれと比べ、どちらかという放任・拒否的でめんどうみが悪く、気まぐれで、愛情の厚さとやさしさが少



図I-8 子に対する親の養育態度と非行傾向の有無

なく、おだやかさに欠ける傾向がある。母親の場合、非行傾向有群は無群と比べ、どちらかという愛情の厚さが少なく、ほんの少し放任・拒否的でめんどうみが悪く、気まぐれであるが、逆にやさしさとおだやかな傾向が多少強い。しかしながら以上の傾向は統計的に有意なほど顕著な特徴とはいえなかった。

全体の平均についていえば、母親と父親の養育態度はそれぞれ、多少放任・拒否的でめんどうみが悪く、気まぐれであり、多少愛情厚く、やさしく、おだやかな傾向があるといえよう。

以上のように、非行傾向有群と無群で親の養育態度に明らかな差異は見い出せなかった。その理由には、親が施設を訪ねてくることが乏しく、子に接する親の態度に関する情報が回答者の職員の方々に少ないために、親の養育態度の質問に対して明確に答えきれなかったことも入っていると推測できる。いずれにしろ、子に対する親の養育態度の質問項目の結果と非行傾向の有無の間に関連性を見い出せなかった。

(VI) 性格特徴

子どもを施設に受け入れ、援助、指導していくうえで、

それぞれの子どもの性格特徴について理解を深め、反省、指針に役立てることは必要かつ重要なことである。しかし、子どもの性格や社会的適応性を正しく判断し、評価することはなかなか難かしいことである。難かしいことであるが、できるだけ、職員に、客観的に、一人一人の子どもの性格特徴を評定してもらうために、今までの諸研究を参考にして、付表に示すような、16対から成る評定のための項目を作成し、5段階評定法により、評定し、記入してもらった。この評定法によれば、段階3を中心に、段階1、2側が好ましい性格特徴を示し、4、5側が好ましくない性格特徴を示すことになる。

そこで、過去にも、現在も、非行傾向の認められない156名の過去現在非行傾向無群と、過去か現在に非行傾向の認められる160名の過去現在非行傾向有群のそれぞれの性格特徴を、1段階から5段階までの評定点数の平均値を算出して、比較したところ、表I-13および図I-9のプロフィールで明らかなように、項目56、"人なつっこい"の平均値は、両群に差がないが、この項目を除く非行傾向有群の他の項目の平均値は、いずれも、非行傾向無群の平均値より高い。この結果から、非行傾向無群の方が、より好ましい性格特徴を示していると云える。このような傾向がみられるところから、前述の156名の非行傾向無群と、過去にも、現在も、非行傾向の認

表 I - 13 性格特徴 5 段階評定の平均値

項目	群		総 評	
	非行傾向 "無" 群	非行傾向 "有" 群		
明るい	44. 2.52	2.67	2.58	暗い
すなおである	45. 2.83	3.24	3.05	強情である
おおらかである	46. 3.02	3.21	3.09	物事を気にしすぎる
意志が強い	47. 2.90	3.43	3.17	意志が弱い
独立心がある	48. 2.99	3.32	3.14	依頼心が高い
きちょうめんである	49. 3.14	3.34	3.23	だらしがない
やる気がある	50. 2.72	3.35	3.02	やる気がない
目立たないことでもする	51. 2.88	3.40	3.11	目立つことが好き
根気がよい	52. 2.90	3.64	3.25	あきっぽい
気分が安定している	53. 2.97	3.58	3.27	気分がかわりやすい
感情表現が豊かである	54. 2.88	3.17	3.00	感情表現が乏しい
がまん強い	55. 2.90	3.42	3.17	かっとなりやすい
人なつっこい	56. 2.65	2.58	2.61	人みしりする
甘える	57. 2.63	2.67	2.65	甘えない
思いやりがある	58. 2.61	2.97	2.79	思いやりがない
協調性がある	59. 2.70	3.27	3.00	協調性がない

められる68名の非行傾向有群の両極端の2群のみに限って、16項目評定の平均値について、t検定を行ったところ、 $t=7.55$, $df=221$ で、0.1%水準で有意差のあることが認められた。

なお、非行傾向無群の方は、16項目の性格特徴のなかで、とりわけ、44. 明るい、58. 思いやりがある、57. 甘える、59. 協調性がある、50. やる気がある、と評定された性格特徴が目立ち、非行傾向有群の方は、とくに52. あきっぽい、53. 気分がかわりやすい、47. 意志が

弱い、55. かつとなりやすい、など、一般に、非行傾向をもつ子どもに従来からみとめられている心配な性格特徴が目立っている。

今回の調査結果から、非行傾向有群には、甘える、人なつこいといった人の愛情を求める性格特徴が認められた。これらの性格特徴のあることが明らかになったことは、今後の施設の子どもたちの援助、指導により指針になると考えられる。

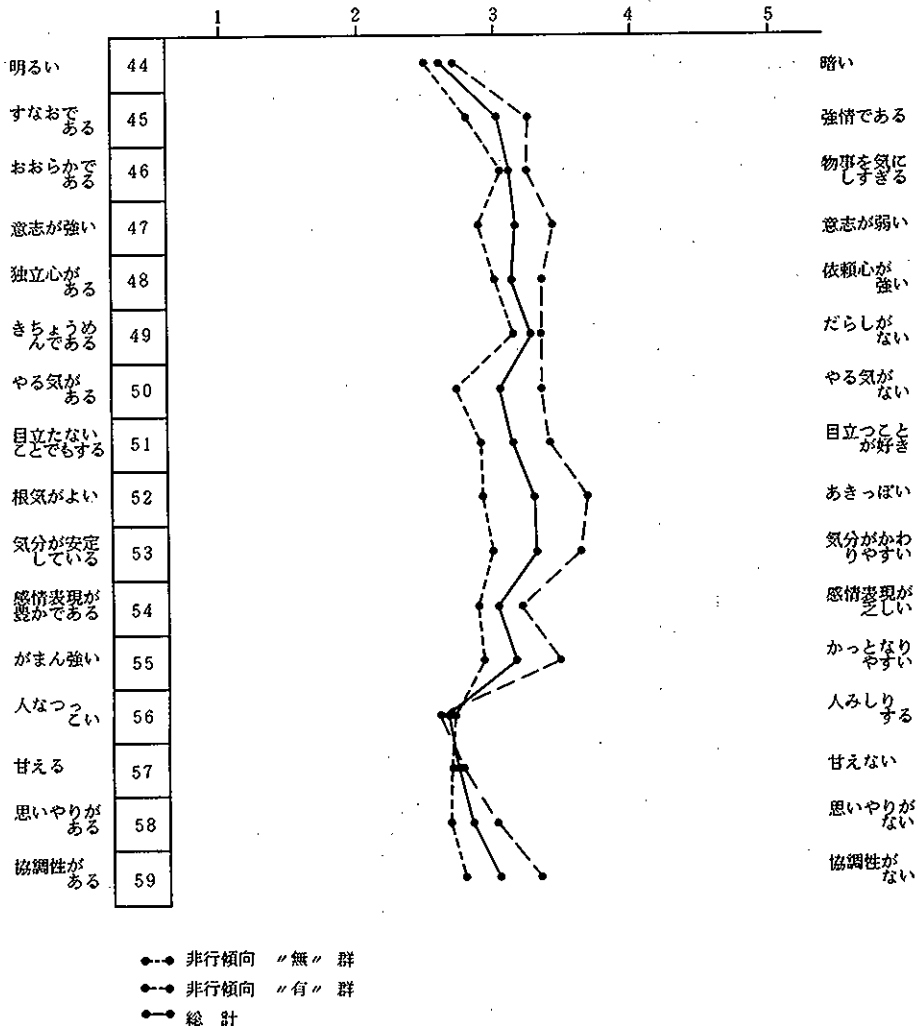


図 I-9 性格特徴 5 段階評定の平均値プロフィール

(VII) 施設内での様子

1. 施設内での子どもの様子

施設内に於ける子どもの様子を知るために職員に11項目について5段階評定をしてもらった。(付表参照)項目番号67, は年の割に幼い, 年の割に大人ばい, であるが, この項目を除けば, 1.が好ましい状態で, 5.が好ましくない状態だと考えることができと思う。1から5の段階のどこにチェックしたかをみて, それぞれの段階の数を掛けて整理した。従って, 数の小さい方が好ましい状態であると云える。

表 I-14 と 図 I-10 で過去, 現在とも非行傾向のなかった者 156 名(過去, 現在非行傾向無群)と, 過去, 現在に非行傾向ある者 160 名(過去, 現在非行傾向有群)と両群の合計と参考までに現在非行傾向がある群72名について5段階評定の平均値を示した。67. 年の割に幼いは前にも述べた通り, 他の評定とは観点が違うので, 非行傾向無群と非行傾向有群と差はないが, 他の項目は非

行傾向有群の方が平均値が高い。この結果から非行傾向無群の方が好ましい状態であると云える。また, 現在非行傾向有群は特にその傾向が目立っている。

次に過去現在非行傾向無群 156 名と過去現在非行傾向有群68名につき上記の理由から項目67を除いた10項目の評定の平均値の t 検定を行った結果, 0.1%水準で有意差が認められた。(t = 7.74, df = 222)

この結果からも非行傾向無群の方が好ましい様子で生活していると云える。また, 施設内で子どもの様子を持っていく上の参考になると考えられる。

(2) 子どもを扱う上での方針

職員が子どもを施設で扱う方針について20項目(付表参照)をあげ, 職員が対象児を扱う上での方針があれば, その中から3項目以内で選んでもらった。その結果は表 I-15 で示した。

選ばれた項目を多い順から6位までを, 図 I-11 総計 図 I-12 過去現在非行傾向無群 図 I-13 過去あるいは現在非行傾向有群, 図 I-14 現在非行傾向有群につき示した。その結果, 上位3位までは各群とも同

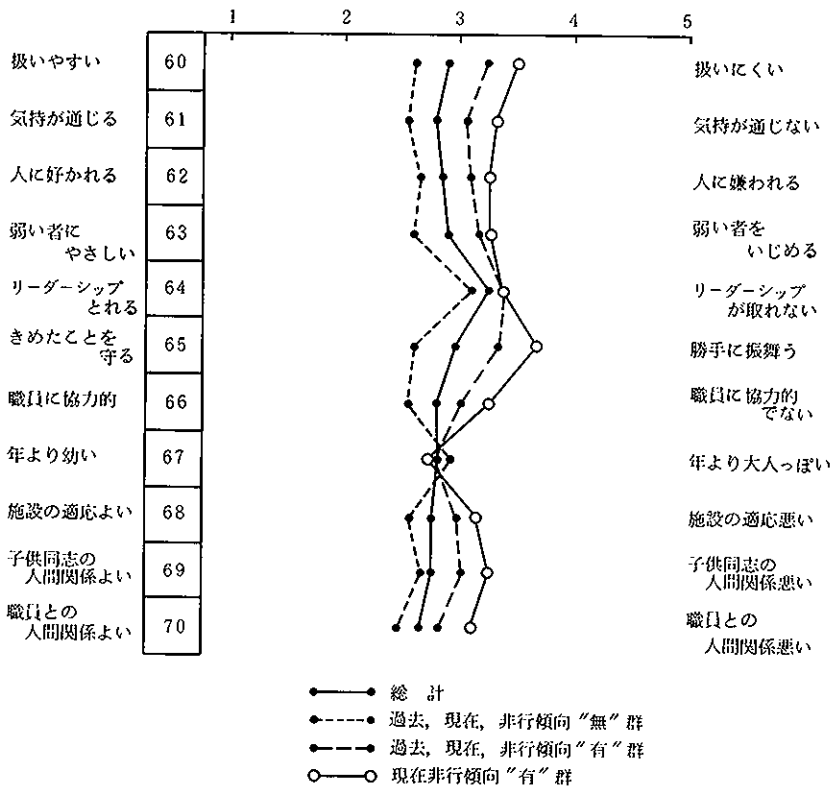


図 I-10 施設内での様子に関する五段階評定の平均値のプロフィール

石井他：年少非行に関する研究（第5報）

表 I-14 施設内での様子に関する5段階評定の平均値

項目	群	非行傾向 無群	過去、現在 非行傾向有群	総計	現在非行 傾向有群	
扱いやすい	60.	2.61	3.23	2.92	3.48	扱いにくい
気持ち通じる	61.	2.55	3.03	2.80	3.31	気持ちが通じない
人に好かれる	62.	2.64	3.09	2.89	3.26	人に嫌われている
弱者に優しい	63.	2.61	3.14	2.88	3.26	弱者をいじめる
リーダーシップもとれる	64.	3.12	3.36	3.25	3.35	リーダーシップがとれない
決めたことを守る	65.	2.59	3.33	2.96	3.65	勝手に振舞う
職員に協力的	66.	2.56	3.02	2.80	3.26	職員に協力的でない
年の割に幼い	67.	2.92	2.74	2.83	2.74	年の割に大人っぽい
施設への適応はよい	68.	2.56	2.96	2.76	3.17	施設への適応悪い
子供同志の人間関係良い	69.	2.66	2.99	2.80	3.25	子供同志の人間関係悪い
職員との人間関係良い	70.	2.43	2.84	2.64	3.11	職員との人間関係悪い

表 I-15 子どもを扱う上での方針（総計 316 名）

項目	1. 甘えさせる	2. やさしくする	3. 面倒をみる	4. 話をよく聞く	5. 話かける	6. 信頼する	7. 意志を尊重する
選ばれた数	25	23	21	147	60	75	58
百分率	2.8%	2.6%	2.4%	16.7%	6.8%	8.5%	6.7%
項目	8. 支持する	9. 方向づけをする	10. 助言をする	11. 励ます	12. ほめる	13. 褒美を与える	14. 慰める
選ばれた数	22	124	76	98	42	6	1
百分率	2.5%	14.1%	8.7%	11.2%	4.8%	0.7%	0.1%
項目	15. 注意する	16. しつける	17. きびしくする	18. 叱る	19. 罰を与える	20. 無視する	選ばれた項目合計
選ばれた数	36	42	15	5	0	2	878
百分率	4.1%	4.8%	1.7%	0.6%	0	0.2%	100%

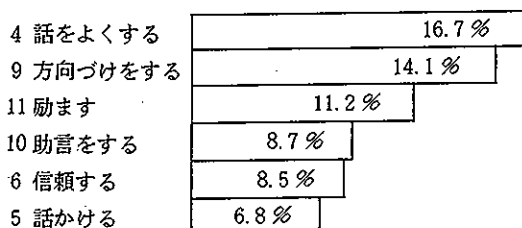


図 I-11 子どもを扱う上での方針の上位6項目（総計 N = 316 名）

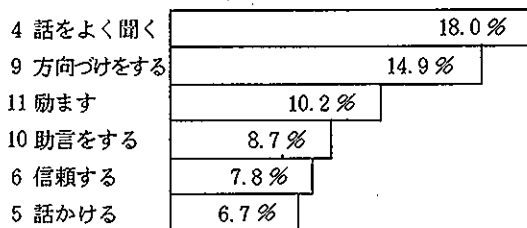


図 I-13 子どもを扱う上での方針上位6項目（過去あるいは現在の非行傾向有群 N = 160 名）

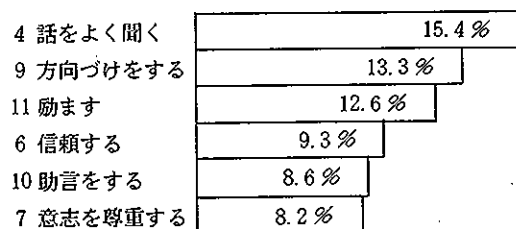


図 I-12 子どもを扱う上での方針の上位6項目（過去現在非行傾向無群 N = 156 名）

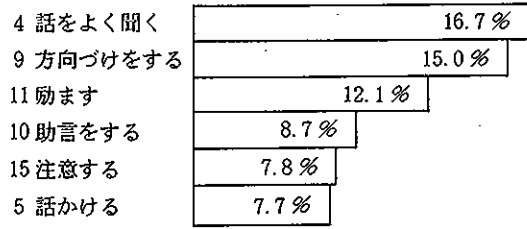


図 I-14 子どもを扱う上での方針上位6項目（現在非行傾向有群 N = 72 名）

じで、1位、話をよく聞く、2位、方向づけをする、3位、励ます、であった。過去現在非行傾向無群だけに6位に意志を尊重するが入っているのは、職員が信頼して、意志を尊重することが出来るのではないだろうか。また、現在非行傾向有群だけに5位に注意するがある。これは、非行傾向があるため、注意する必要がある行動をすることがあるからだと思われる。全体をみると、19. 罰を与えるが0であり、次いで14. 慰めるが1で0.1%、20. 無視するが2で0.2%と極めて少なくなっている。以上の結果から、施設で子どもを扱う方針に子どもによらず、話をよく聞く、方向づけをする、励ます、である。これは今後、施設で子どもを扱っていく上の指針にもなると思われる。

II. 児童本人に対する調査票

(1) 文章完成法 (SCT)

文章完成法とは被験者に未完成の短文を与え、それによって連想される事柄を自由に記述して1つの文章を完成させる投影法的人格検査の一種である。これを本調査の一部として使用した理由は、記述される反応内容が与えられた刺激文によってある程度は規定されるものの、質問紙法よりは規定される枠組ははるかにゆるやかであり、それだけ児童のありのままの体験が生き生きと反映されることが期待できるからである。同時に、刺激文の設定の仕方によっては児童の意識内容や性格・行動の特徴、および日常生活様式にいたるまで、対象児の全体像を巾広く把握することが可能になるという利点もある。今回施行した文章完成法は、これまでに開発されている多くの文章完成法、とりわけ中学生を対象としたものを参考にしながら新たに作成したものであるが、その構成は次の7つの柱(26項目)から成っている。

- | | | |
|--------------|----|-----|
| 1) 自己像 | …… | 5項目 |
| 2) 両親像・家族像 | …… | 4項目 |
| 3) 対人関係 | …… | 5項目 |
| 4) 感情・対処様式 | …… | 5項目 |
| 5) 価値規範・社会意識 | …… | 3項目 |
| 6) 願望 | …… | 2項目 |
| 7) 生活意識 | …… | 2項目 |

結果の整理にあたっては、まず対象児を非行傾向“無”群(現在まで非行傾向が認められないもの)156名と非行傾向“有”群(現在非行傾向が認められるもの、および過去に非行傾向があったもの)169名とに分けて集計し、非行傾向の有無についての記載が漏れていたり不明

のもの20名については分析の対象から除外した。それぞれの項目ごとについては、反応内容を基本的にはPos(肯定的積極的反応)、Neg(否定的消極的反応)、Amb(肯定・否定の両方を含む反応)、Nt(中立的客観的反応)、それにNa(反応拒否および失敗)の5つのカテゴリーに分類した。ただ、Naについては全ての項目で10%以下と低い割合しか示していないので、最終的には分析の対象とするカテゴリーからは除いてある。また、上述の5つのカテゴリーに分類することが不可能な項目については、あらかじめ肯定・否定以外にもカテゴリーと分類基準を設定し、それに基づいて分類したが、カテゴリーの数はできるだけ少なくなるよう留意した。

非行傾向“無”・“有”両群間の比較は、それぞれのカテゴリーごとに有意差の検定を行った。しかし、この調査では統制群を設定してはいない。養護施設における児童のいかなる個人的・社会的条件が非行の発生要因となりうるかについて正確に把握するためには、彼らと同年代、つまり思春期・青年前期にある児童の人格発達全体の全体像をとらえておくことが必要となってくる。そこで、結果の考察にあたっては、ほぼ同様の文章完成法を用いて公立中学校1～2年生の男女497名を対象にして調査した池田等の研究(1982)の結果をも参考にしながら検討を加えることにする。厳密な意味では、2つの調査は母集団も調査方法も多少異なり、両者を同一次元で比較することはできないが、思春期・青年前期の全体的な人格発達を示す1つの尺度としては十分に参考になると考える。

1) 自己像

過去の自己像「1.子供の頃、私は…」は、両群間に差は認められないが、肯定的反応よりも否定的反応の方が両群共はるかに高い割合を占めているのが特徴である。これを公立中学生でみても、肯定的反応と否定的反応が30%前後で相半ばしており、とくに否定的反応においては養護施設の児童より10%以上まわっている。内容的にも公立中学生の否定的反応は(泣虫だった、内気だった)というように自分の性格の否定的な部分を記述したものが多いのに対し、養護施設の児童は(叱られてばかり、嫌われ者、一人ぼっち)と、幼い頃のさまざまな対人関係における経験が過去の辛い記憶として鮮明にきざみこまれ、自己像もそうした体験から派生した否定的イメージとして形成されている傾向が強いことがうかがえる。

現在の自己像「22. 私は自分のことを…」「11. 人に比べて私は…」についても、過去の自己像とほぼ同様の傾向がみられる。思春期をむかえ、それまではどちらか

表II-1 自己像

項目	カテゴリー：反応例	“無”	“有”	χ^2
1. 子供の頃の私	Pos : 楽しかった, 明かるかった, 元気だった, かわいかった, もどりたい, 無邪気な子だった	26.5 ^(%)	23.3 ^(%)	
	Neg : 叱られてばかりいた, 嫌われ者だった, 一人ぼっち, いやなことばかり, 自分勝手な子だった	39.2	42.0	
	Amb : 悪い子だけどよく遊んだ, 楽しいこともつらいこともあった, なつかしいけど寂しい	1.2	1.1	
	Nt : ○○に似ていた, ○○が好きだった, 普通, 乳児院にいた, マンガを読んでいた	28.9	31.8	
22. 私ことは自分のこと	Pos : (素直・明かるい・優しい・幸福…) だと思う, 好き, わかってる	30.2	23.3	
	Neg : (性格が悪い・なさけない・頭が悪い・意地悪…) だと思う, 嫌い, 認めない	42.2	49.4	
	Amb : 好きな時と嫌いな時がある	0	0.6	
	Nt : (普通・人間・サッカー少年・笑い上戸…) だと思う, 何とも思わない	20.5	21.6	
11. 私には比べて	Pos : (頭がいい・明かるい・思いやりがある・めぐまれている・かっこいい…) と思う	15.7	23.9	
	Neg : (バカ・ブス・良くない・少し異常・みじめ・ツッパリ・暗い…) と思う	56.7	62.5	
	Amb : 劣っているけどやさしい, いい所と悪い所がある, おこりっぽいけど優しい	3.6	2.8	
	Nt : みんなと同じ, 変わらない, オテンバ, ○○さんのことが好き(嫌い)	16.9	8.0	*
6. 私の将来は	Pos (積極的態度): (立派な・役立つ・信頼される) 人間になる, 楽しみ, 自分で決める, 親につくす	15.7	11.4	
	Neg (消極的・不安): 不安だ, まっ暗, 悲惨, 迷ってる, 警察につかまる	12.0	22.7	**
	Nt : いろいろ, 考えている, 普通の人間になる	3.0	2.8	
	具体的願望: (保母・運転手・歌手・幼稚園の先生・パイロット…) になりたい	66.3	61.4	
20 私をよく人から	Pos : (かわいい・かっこいい・おもしろい・優しい…) と言われる, 相談される, 親切にされる	34.9	30.7	
	Neg : (バカと・欠点を・きつく・陰口を…) と言われる, 叱られる, いじめられる, 相手にされない	31.3	44.3	*
	Amb : (明かるいけど短気だと・責任あるとも無責任だとも) と言われる, 優しくされたりいじわるされる	1.8	1.1	
	Nt : ニックネームでよばれる, 物をもらう, ○○に似てると言われる, 何とも言われない	22.9	17.0	

* P < 0.1

** P < 0.05

たとえば外界に向けられていた興味や関心の対象が自分の容姿や能力、パーソナリティの特徴など、内面に向くようになると、この鋭くときざまされた自己意識はまた、彼らに強い自己嫌悪や劣等感を体験させることを意味するのであるから、この時期において否定的自己像が肯定的自己像を大きく上回る傾向にあることは一般にもよく認められているところであり、本調査の結果とも一致する。しかし、個人個人の文章完成法を事例的にながめた場合、非行傾向“有”群の肯定的自己像の内容が、「私は自分のことを天才だと思う・人に比べて私は最高」というように、他者を意識して見栄や虚勢を張っているというニュアンスが強く、本人の実感からはやや離れた記述

内容が多いという印象がある。この点からすると、同じ肯定的自己像でも非行傾向“無”群と内容的に等しいと考えることには疑問が残るが、統計的には両群間に有意差はみられない。

一方、将来の自己像「6.私の将来は…」になると、Negのカテゴリーで両群間に5%水準で有意差が認められた。つまり非行傾向“有”群では、自分の将来に対する不安や否定的見通しをいんでいるもの有意に多いことになる。乳児院を含めた現在までの施設での通算在所期間をみると、非行傾向“有”群は“無”群より平均で約1年間も長い。幼い時から何らかの理由で親とは別に生活してきた子どもにとって自らの将来を想う時、そこに漠

然とした不安や怖れを抱きやすいことは容易に想像できる。

また、他者から認知されている自己像である他己像「20. 私はよく人から…」についても、Neg のカテゴリーで非行傾向「有」群が有意に高いという結果がでている。他者が自分に対していかなる行動や態度をとるかということは、自己概念の形成にとって重要な要因となりうるが、相手からバカにされたり、陰口を言われたり、いじめられるという体験は、ただでさえ他者からの評価に鋭敏になっている彼らの自我を傷つけ、自己概念は一層否定的な色彩を帯びてくることは想像に難くない。

2) 両親像・家族像

養護施設の児童の父親像・母親像については、1つの例外を除いて、ほとんどのカテゴリーで両群間に有意差は認められないので、両群をまとめて全体として考察す

る。まず父親像ではおよそ40%が肯定的な感情や関係を記述しており、否定的反応は15%程度と低い。同様に、母親像でも35%近くが肯定的に見えて、否定的な内容のものは約13%という結果であった。これは公立中学生の傾向ともほぼ一致するものであり、とくに考察するに値しないと思われるが、否定的反応の内容を養護施設の児童と公立中学生とで注意深く比較してみると、質的にはかなりの差異があることがわかる。つまり、公立中学生の主な反応例としては(嫌いだ、すぐおこる、口うるさい)等、比較的穏やかな否定の内容であり、親の性格や行動の属性をとらえそれを厳しく批判したり嫌悪するといったものよりは、親を自分達の世界に侵入してきたり干渉してくるものとしてイメージ的にとらえ、それに対して拒否しているといった意味合いが強い。一方、養護施設の児童に多くみられた反応例は、(うそつき、う

表Ⅱ-2 両親像・家族像

項目	カテゴリー : 反 応 例	“無”	“有”	χ^2
7. 父のことは	Pos : 好きです、やさしい人です、信頼している、働き者だと思う、自慢できる、感謝・尊敬している	41.6 ⁽⁹⁾	38.2 ⁽⁹⁾	
	Neg : 嫌い、うそつき、うらんでいる、縁を切りたい、変態だと思う、私を疑っている	14.5	18.2	
	Amb : 怖いけど好き、よくおこるけどやさしい	2.4	1.1	
	Nt : 仕事している。ハゲている、〇〇の仕事をしている、お酒が好き、今は病院にいる	11.4	12.5	
	イメージ無し・不明 : 知らない、わからない、会ったこともない、いない	27.1	28.4	
21. 母のことは	Pos : 好き、やさしい、かわいがってくれる、見習いたい、とても会いたい、親孝行したい	31.9	37.5	
	Neg : 考えたくない、どうでもいい、私に関係ない、他人、浮気する、許せない、殺したい	11.4	14.8	
	Amb : やさしい時と怖い時がある、憎んでいるけど会いたい	7.2	1.1	**
	Nt : 知ってる、女である、父と仲良くしてほしい、今どうしているのか、気にしていない	9.6	8.0	
	イメージ無し・不明 : 知らない、わからない、会ったことない、いない	34.3	36.4	
9. 私といたっては家族	Pos : あたたかい、大切、頼りになる、落ちつく、なくてはならないもの、私を守ってくれるもの	55.4	52.8	
	Neg・イメージ無し : きまずい、よくわからない、めちゃくちゃ、関係ない、こわれやすい、ないも同然	16.9	26.7	*
	Amb : いい家庭だけど今はバラバラ、私にやさしいけどつまらない	3.6	0.6	
	Nt : 〇人家族、施設の人、平凡、身内、血がつながっている	16.9	13.6	
	願 望 : ほしいもの、母と一緒に暮らしたい、みんなと協力してつくりたい	1.2	2.3	
18. 家私の人を	Pos : かわいがってくれる、心配している、見守ってくれてる、応援してくれる	41.0	40.4	
	Neg・不明確 : どう思っているのか、すぐ怒る、批難する、嫌っている、放っている、忘れてる	39.8	42.6	
	Amb : かわいがるけどわかってくれない、バカにしたり優しくされたりする	1.2	2.3	
	Nt : 〇〇と呼ぶ、見てる、〇〇みたいだという、別に	10.2	11.9	

* P < 0.1

** P < 0.05

らんでいる、考えたくない、許せない）等、両親に対する憎しみや恨み、怒りといった感情が露わに表現されたものになっている。現在自分が置かれている状況を考える時、自らを被害者の立場に置き、それが両親への強い思慕の情とも相俟って激しい両親への否定的感情となったのであろうが、これが解決されるまでにはかなりの時間が必要となってくるであろう。

両親像についてもう1つの特徴は、両親のイメージ無し・不明というものが、父親像で27.9%、母親像で35.5%もいるということである。当然のことながら、こうした傾向は公立中学生にはほとんど認められない。養護施設の児童に両親像が不鮮明なものが多いという理由として、彼らが早い時期から両親と、あるいはそのどちらかと生死を問わず別れて生活せざるをえなかったということが常識的には考えられるが、原因はそれだけではないようにも考えられる。というのは、「父(母)のことは：わからない、知らない」と記述した児童のすべてがすべて、幼い頃に両親あるいはそのどちらかと死別・生別した生育歴をもっているとは限らないからである。現在でも親と何らかの関係が続いていたり、小学生になってから親と死別・生別したという児童もかなり含まれている。この事実からすると、両親像が稀薄なのは、子どもの心の中に両親のイメージが明確に形成されるほどには、親子の関係が親密で安定したものではなかったということも考慮する必要がある。

家族像である「9.私にとって家族というのは…」では、両群共半数以上のものが家族のことを（あたたかい・大切・頼りになる）と、肯定的に見ていることがわかる。ところが、否定的反応については非行傾向「有」群の方が10%水準で有意に高い結果になっている。そこには単に、家族の構造や機能が崩壊しているために、家族成員相互の結びつきが弱いというだけではなく、子どもにとって「家族」というイメージそのものがあいまいになっているというニュアンスさえくみとれる。

家庭内の人間関係をとらえようとした「18.家の人は私のことを…」という項目では、両群共肯定的反応と否定的反応が40%前後ではほぼ同率になっている。ただ、否定的反応の中には3割近くも、家族の人、特に親は私のことをどのように思っていてくれるのかよくわからない、という意味の反応が含まれていた。つまり、親は自分のことを本当に愛してしてくれるのか、憎んでいるのか、あるいはまた、どの程度期待をしているのか、あきらめているのかという、つまり親の自分に対する気持をつかみかねているということである。このことは先に述べた、両親のイメージが稀薄であるということ、また、「家族」と

いうイメージそのものがあいまいであるということとも基本的には関連している。したがって、もしこのような状態が何ら解決されることなしに成人を迎えることになったならば、その個人の男性像・女性像、ならびに家族像にはかなりのかたよりが生まれる可能性があるということはいままでのない。

3) 対人関係

ここでは児童の対人関係の様相をいくつかの側面からとらえてみた。まず「3.私の友達…」については、その多くが優しく良い人と感じていて、「多人数・多種類」のカテゴリーを加えると、両群共80%以上が友人と親和的關係を維持していることが理解できる。友達に拒否感や悪感情をもったり、友人が少なくして一人孤立していると感じているものは10%にも満たない。この項目ではすべてのカテゴリーについて、公立中学生の結果とほぼ一致している。

次に「2.人に親切にされると…」どのような態度をとるかということに関しては、両群で80%以上が感謝の気持ちをもったり、うれしくなると答えているが、これは当然の結果ともいえる。ところが2番目には、（照れてしまう、恥ずかしい）があがっている。これは他者から思いやりや親切心を示されると、それを素直に受け容れることには躊躇し、うれしさや感謝の念を感じるのを抑え込もうとするこの年代に特有の心性が反映されたものといえる。反対に、「14.人から注意を受けると…」どうであろうか。この場合は、非行傾向「無」群と「有」群とでは明確な差が認められた。まず、他者からの注意を素直にきいて反省するのは、非行傾向「無」群の方が5%水準で有意に高く、逆に、人の注意には反発や反抗をしたり、あるいは相手のことを無視したり、いいわけをしてごまかそうとするのは、5%水準で非行傾向「有」群に多いのである。つまり、人からの思いやりや親切には両群共感謝の気持ちで受けとめようとする傾向が認められるが、人からの注意に対しては、両群で半数以上が反発や反抗を示したり、合理化や無視という態度をとる傾向がみられ、とくに非行傾向「有」群ではその傾向が顕著になっているといえる。

こうした結果からすると、養護施設の児童はいったい誰と信頼関係をもち、自分の本心をうちあけることができるのかということが問題になってくる。そこで「17.心をうちあけられるのは…」という項目の反応内容を見ると、非行傾向「無」群では、その対象は友人が29.5%でトップであり、非行傾向「有」群でも24.4%と高い。ところが非行傾向「有」群では、これ以上に（心をうちあけられる人はいない・できない）というカテゴリーで

表II-3 対人関係

項目	カテゴリー：反 応 例	“無”	“有”	χ^2
2. 人にされる親切に	感謝・快感情：うれしい，ありがとうと言う，気持ちいい，人にお礼したくなる，自分もそうしようと思う	80.2 ⁽²³⁾	84.0 ⁽²³⁾	
	照れ・恥ずかしさ：顔が赤くなる，はずかしい，照れて下を向いてしまう	10.8	8.5	
	反発・無視：頭にくる，だまって無視する，おせっかいだと思う	4.2	5.7	
	Amb：うれしいけどむかつく，うれしいけど嫌だ	1.8	1.7	
	Nt・その他：友達になる，静かにしてる	1.8	0	
3. 私の友達は	好感情：優しい，いい人ばかり，おもしろい，気持ちをわかってくれる，気が合う，明かるい	65.1	71.0	
	多人数・多種類：いっぱいいる，いろいろながいる	19.3	11.9	
	悪感情・拒否：みんな嫌いだ，悪人ばかり，すぐいじめる，無責任	3.0	5.7	
	無し・少ない：いない，少しだけしかいない	0.6	4.0	
	Amb：好きな人もいるが嫌いなものもある，みんな不良だけどやさしい Nt：○○さん，人間，普通，年上の人	8.4 3.0	3.4 4.0	
14. 人受けから注意を	反省・従う：反省する，素直にきく，自分が悪ければあやまる	29.5	18.2	***
	恥ずかしさ：恥ずかしい，顔が赤くなる	3.6	1.1	
	反発・反抗・嫌悪：むかつく，言い返す，頭にくる，ふてくされる，不機嫌になる	54.8	65.3	***
	合理化・無視：いいわけする，しらんぷりする，ごまかす	0	4.5	
	Amb：むかつくが反省する，きく時と反発する時がある Nt：自分が悪いことをしたからでしょう	5.4 0.6	4.5 1.7	
17. 心をくれるのあはけ	友人：親友だけ，友達	29.5	24.4	***
	親・家族：家族の人，父，母，両親，兄弟	6.6	9.6	
	先生：学校の先生，寮の先生，小学校の時の先生	7.2	4.5	
	特定の個人：○○さん，私の好きな人，信頼してる人，私を理解してくれる人	12.0	8.0	
	無し・困難：いない，自分，できない，ぬいぐるみ，緊張して言えない その他：神様，勇気が必要，こまった時	19.3 16.9	36.4 9.6	
23. 人に対して私は	親和：親切，優しい，仲がいい，好かれる，素直，思いやりがある	31.9	27.3	
	冷酷・拒否：いじわるする(いじめる)，きつい，すぐおこる，悪口を言う，冷たい	26.5	35.8	
	緊張・困難：うまくいかない，ぎこちない，仲良くなれない，気をつかう，のろい	4.2	3.4	
	Amb：優しいけどいじわるする，親しいけどおこることが多い	7.8	8.5	
	願望：優しくしたい，ケンカしないようにしたい，仲良くしたい その他：好き嫌いがはっきりしてる，人によって態度が変わる，普通	6.0 15.1	4.5 14.2	

* P < 0.1 ** P < 0.05 *** P < 0.01

36.4%と非常に高くトップを位置し，しかも非行傾向“無”群との間には1%水準で有意な差が示されている。思春期・青年前期の児童が友人関係を大切に思い，意味を置こうとすればするほど，悩みを相談し，心の内を話しする相手として友人を選ぶことは十分に納得できる。しかし，1)の自己像のところであつたように，非行傾向“有”群は他者からは否定的に見られているという意識が強いため，他者に自分のことを理解してほしい，受け容れてもらいたいという欲求をもちながらも，相手から注意を受けたりするとすぐに反発してしまい，容易には自己開示しようとはしない彼らの複雑で孤獨な内面をのぞかせている。

「23. 人に対しては…」では，これまで述べてきた対人関係のあり様の特徴がそのまま反映された結果になっている。非行傾向“無”群では親和的対人関係を記述したのは31.9%と一番高く，逆に相手を拒否したり冷酷なかかわりを記述したのは26.5%である。一方，非行傾向“有”群でのトップは“冷酷・拒否”のカテゴリー(35.8%)で，“親和”のカテゴリーは27.3%で2番目である。このように両カテゴリーの順位は両群間で逆転しているが，統計的には有意差は認められない。

4) 感情・対処様式

思春期にはいと，生活空間は急激に拡大し，彼らが体験する問題はますます多種多様化するのために，それだ

石井他：年少非行に関する研究（第5報）

表Ⅱ-4 感情・対処様式

項目	カテゴリー・反 応 例	“無”	“有”	χ^2
24. とても気にかか るの は	対人関係：友達の間柄、いじめられること、友達に嫌われてる（無視される）こと、うわさ話し	23.5 ^(%)	22.2 ^(%)	
	将来・進学：これからどうなるか、進学できるのか、いつ寮を出られるか	9.6	13.1	
	学業：成績が悪いこと、勉強がわからないこと	6.6	4.5	
	行動・態度：ひねくれていること、すぐおこること、オネショのこと、決めたことを守れないこと	3.6	5.1	
	容姿・健康：太っていること、なぜ背が低いかということ、病気がいつ治るか	9.0	7.4	
	親・家族：今、父(母)はどうしているか、家のこと、母が家を出ていった理由	13.3	13.6	
15. 不安な のは	無 し：ない	14.5	17.0	
	そ の 他：伝染病、戦争が起こるのでは、地震、なくした物、明日の天気、自分の運	9.0	9.1	
	対人関係：いじめられること、友人のこと、ケンカに負けること、悪口を言われること、無視されること	10.8	9.6	
	将来・進学：仕事につけるか、これから先のこと、高校に行けるか、結婚できるか	22.9	20.5	
	学業：宿題のこと、さされて答えられないこと、勉強ができないこと、テストの点	17.5	18.1	
	親・家族：両親・兄弟のこと、父(母)がいないこと	7.8	8.4	
19. 私と 思う こと は	死 死：いつ死ぬか、死んだらどうなるか	6.0	4.0	
	無 し：ない	12.0	13.6	
	そ の 他：(出来事・事故・戦争・病気・地球の滅亡他)、一人である時、夜、クラブ活動	16.3	18.8	
	失敗・過ち：失敗をした時、さされて答えをまちがえた時、宿題を忘れた時	28.9	24.1	
	人前・注目：人前に出しゃべる（発表する）時、みんなに注目された時	19.3	18.2	
	自分を知られる：自分の本当のこと（ex. 親がいない・寮にいる…）が知られてしまうこと	1.2	7.4	***
5. お気 もし る時 は	学業：テストの点が悪いこと、勉強ができないこと	5.4	8.4	
	行動・態度：自分の欠点(ex. 口が悪い・だらしない・言うことをきかない…)	10.2	9.7	
	容姿：デブ、出っ歯、足が太い、頭の形が悪い、まぶたが一重	7.2	6.3	
	無 し：ない	15.1	14.2	
	そ の 他：泳げないこと、オナラをすること、いっぱいある、世間知らずなこと	5.4	8.0	
	お気 もし る時 は	発散・解消 (全体)	58.4	48.2
遊ぶ・スポーツ：遊ぶ、マンガを見る、サッカーをする、レコードを聞く、テレビを見る		19.3	15.9	
食べる・寝る・歌う：ヤケ食いをする、ゴロゴロ寝てる、大声で歌う		12.0	10.8	
解決・努力：何とかはらそうとする、理由を考える、相談する		3.0	1.1	
そ の 他：いろんなことする、友達と話す、一人で散歩する		24.1	20.4	
抑 制 (全体)		18.6	11.4	
12. 思 い き り	苦 悩：悩む、いろいろ考え込んでしまう、落ち込む	6.0	4.0	
	内閉・無為：一人になる、自分の部屋にこもる、何もしなくなる、ボーとしてる	12.6	7.4	
	解決不能：八つ当たりする、なぐる、怒る、ふくれる、ケンカする	21.1	38.1	***
	遊ぶ・趣味：外で遊びたい、旅行したい、マンガを読みたい、音楽を聞きたい	46.4	45.5	
	食べる・寝る・大声：ごちそうを食べたい、ねてみたい、大声を出したい	7.8	7.4	
	スポーツ：サッカー・野球をしたい、走りまわる、飛び上がる	13.9	14.2	
12. 思 い き り	自己開放：自由になりたい、のびのびしたい、やりたいことをしたい	11.4	8.5	
	感情表現・爆発：なぐりたい、悪いことしたい、いじめたい、いたずらしたい	4.2	5.7	
	夢：空を飛びたい、宇宙に行きたい	3.0	0.6	
	そ の 他：やせたい、恋をしたい、母に抱かれたい、車(馬)に乗って走りたい	10.2	13.6	

*P < 0.1

**P < 0.05

***P < 0.01

け喜び・悲しみ・怒り・恐れなどの感情を多く経験することになる。ここではそうしたさまざまな感情の中からとくにコンプレックスと深く結びついた日常生活で気にかかっていること、不安なこと、はずかしいと思うことの3つの内容に焦点を絞り検討するとともに、フラストレーションや衝動を感じた時の対処様式についても考察する。

「24. とても気にかかるとは…」友達の気持、いじめられること、嫌われていることといった、友人関係にまつわるさまざまな事柄についての記述が非行傾向「無」群で23.5%、「有」群で22.2%と最も高かった。友達の自分に向けられたまなざしを敏感に察知し、仲間の一員として認められているかどうかを気に配る彼らの心の動きは十分に推察できる。次に高いのは「無し」の категорияであるが、3番目に「親・家族」が続いていることは注目すべき結果である。幼い時に親や家族と別れたり、長い間家族や親元を離れて生活している養護施設の児童にとっては、やはり親や家族の生活よりは常に心の片隅からは消え去ることのない事柄になっていることがわかる。

一方、「15. 不安なのは…」では、自分の将来のこと、勉強に思うような結果が得られないこと、友人との関係のことの3つが両群共大きな不安の対象になっている。なかでも、寮を出てからどのような仕事に就くことができるのか、自分で生活をやっていくことができるのかという不安がとくに目立っている。こうした問題はまた遠い先の問題であるようでいて、すぐに直面せざるをえない事柄でもあるし、社会に出た時の自分自身や生活のイメージが漠然としてとらえどころがないために、一層不安をかきたてる要因になっているものと考えられる。また、勉強がついていけない、宿題ができないといった学業に関する悩みも、両群で2割近くのもの不安の対象としてあげているが、成績が重視される今の学校生活では、こうした悩みはかなり深刻な問題になっていることがうかがえる。

「19. 私がはずかしいと思うことは…」については、何か失敗をしたり、答えをまちがえたりといった「失敗・過ち」の categoryと、「人前に出てみんなの注目を浴びる時」の2つの categoryを合わせると、非行傾向「無」群で48.2%、「有」群で42.2%と非常に高い。この結果は公立中学生のパーセンテージともほぼ類似しており、他人の目をとて意識するこの年齢特有の自己意識の強さと敏感さを示唆したものになっている。ことに、非行傾向「有」群では自分に親がいないことや、寮で生活していることが友達に知られるのが恥ずかしいと感じてい

るものが意外に多い（5%水準で有意差）ことは見逃せない問題である。というのは、このように記述した事例について他己像など他の項目の内容とも引き合わせながら個々に見ていくと、親がいなかったり、寮で生活していることが、友達からのからかいや陰口、それにいじめのかっこうの種になっているという事実がわかるからである。こうした体験は疎外感やフラストレーションを一層増大させ、その感情が何かを契機にして一挙に爆発するという可能性もないわけではない。

フラストレーションを感じた時、どのような対処様式をとるかという「5. おもしろくない気分の時は…」では、非行傾向「無」群で58.4%、「有」群で48.2%が遊びやスポーツなどで発散したり、解消しようと努力していることがわかる。ところが、非行傾向「有」群では、おもしろくない気分を抑制できずに他人をなぐりたい衝動にかられたり、実際に八つ当たりしたり、ケンカをするなど行動化してしまう傾向が「無」群に比べ1%水準で有意に高くなっている。フラストレーションの原因を外に求め、外罰という形で行動化することは、自己の感情をコントロールできないほどに自我が弱いのか、あるいはそれほどにフラストレーションが飽和状態であるのかは一概に判断はできないが、いずれにせよ施設での指導上留意しなければならない点であろう。

自分の感情や欲求を発散させる対象としては、「12. 思いきり…」遊びたい、自分の好きなことをしたいというのが両群で45%を越えている。その他にはスポーツ、自己解放、食べる・寝る・大声を出すの順であり、この傾向は小学校高学年や中学生一般に見られる感情表出の様式でもある。

5) 価値規範・社会意識

ここでもほとんどの categoryで両群間に有意差が認められないので、全体としてまとめてみると、まず「10. 悪いことをしたら…」の項目では、(反省する・謝る)のものが57.3%で一番多いが、(ウソをつく・ごまかす)のも16.1%と予想外に多い。これに「謝らない」の categoryを加えると全体でおよそ2割のものが、悪いことをしたという自分の行為に対して反省し、謝罪することはできるだけ避けようとしている傾向があることがわかる。

次に価値観についてであるが、一般に価値といっても社会的価値や個人的価値、美的価値や宗教的価値などさまざまであるが、ここではその中から特定の価値に限定するのではなく、「25. 何よりも大切なことは…」という項目により多面的に価値をとらえようとした。その結果、他者への思いやりが18.1%で最も高く、これに人間の命、

表II-5 価値規範・社会意識

項目	カテゴリー：反応例	“無”	“有”	χ^2
10. 私に悪いことをしたら	反省・謝罪：いけないことをしたと反省する，相手に謝る，後悔する	60.2 (%)	54.5 (%)	
	合理化・逃避：かくす，逃げる，ウソをつく，いいことをしてごまかす，ほっておく，笑う	12.0	19.9	
	不快感：気分が悪くなる，あせる，不安になる，恐くなる，悩む	12.0	9.7	
	処罰：叱られる，罰を受ける，捕る，坊主にされる	6.0	3.4	
	謝らない：謝らない，謝ることできない，別に	4.2	7.4	
その他：祈る，悪い，相談する，走る	2.4	2.8		
25. 何よりも大切なことは	命：人間の命，生きていること	11.4	16.5	***
	親・家族：家族，両親，父，母，父(母)がしっかりしていること	13.3	11.9	
	思いやり：思いやり，親切にすること，やさしさ，助け合うこと	21.1	15.3	
	友人・対人関係：友情，友達とうまくやること，仲良くすること，相手の話を聞くこと	9.6	9.7	
	心・愛：人間の心，愛すること，信ずること，心が通じ合うこと	4.8	11.9	
	自己の成長・努力：自分の力で生きる(頑張る)，立派な社会人になること，人生，自分自身	8.4	8.0	
	学業：勉強すること，テストで良い成績をとること	10.2	4.5	
無し・不明：ない，よくわからない	6.0	1.7		
その他：お金，スポーツ，宝物，結婚，言えない	7.8	14.8		
26. 世の中の人	Pos：偉い，みんないい人，素晴らしい，厳しさをのりこえた人，いろいろ知っている，尊敬する	22.3	14.2	
	Neg：ウソつき，信用できない，嫌い，他人，乱れている，うるさい，怖い	28.3	27.8	
	Amb：良い人もいるけど悪い人も多い，親切だけどよくわからない	19.3	24.3	
	Nt・願望：仕事している，いろいろ，男と女，救ってほしい，みな同じ，タバコを吸う	19.9	26.7	

* P < 0.1

*** P < 0.05

親・家族がつづいている。他者への思いやりに人間の心，愛情，信頼を加えると全体の4/5が精神性に最も価値をおいていることになる。また，親・家族を何よりも大切に思っているものが12.6%もいるが，こうした傾向は同年齢を対象とした同じ様な調査の結果にはあまり見られないことである。つまり，ほとんどの児童が親や家族のことをとても大切に思うことは当然であるが，それをこうした調査でいっぺんに掲げるとはあまり多くはないという意味である。これまでに両親像や家族像のところで考察してきた結果とも考え合わせると，やはり養護施設の児童の心にはそれだけ親や家族への熱い思いがあることが推察できる。

「26.世の中の人」については，(信用できない・ウソをつく，嫌い)といった否定的な内容が肯定的反応をかなり上回っていて，その傾向はとくに非行傾向“有”群に強く，ほぼ2倍近くにまでなっている。ただ，否定的な反応の内容には，嫌いかか恐いかといった感情的要素を含むものが多く，彼らがどれだけ世の中の人を客観的にしかも正確につかんでいるかという，認識の分化度についてはやや疑問が残る。

6) 願望

思春期・青年前期の児童のもつ夢や願望は，物事に対する興味や関心が個人的なものから社会の出来事，さらには世界，宇宙，神秘的なものにまで拡大されていくにつれ，内容的にもバラエティーに富んだものになっていく。そこで，「4. できることなら…」という項目では，反応内容をまず“具体的・実現可能な内容”と“抽象的・実現不可能な内容”の2つのカテゴリーに大別してみた。その結果，具体的で実現可能な願望は両群共に85%を越えていて，もう一度生まれ変わりたいとか魔法が使いたいといった実現不可能な内容は10%前後にとどまっている。具体的・実現可能な願望の内容を詳細にみると，(できることなら何でもやる・一生懸命頑張る・自分でやる)と積極的な姿勢を示しているものが全体で2割を越え最も高い。次に多かったのが“将来の生活”のカテゴリーであるが，そのほとんどが早く寮を出て，親や家族と一緒に暮らしたいといった主旨の内容のもので占められているのが特徴である。また，思いきり遊んでみたいとか，マンガを読みたいとかいった小学校高学年や中学生には最もなじみ深い具体的な願望は，10%をわ

表Ⅱ-6 願 望

項目	カテゴリー：反 応 例	“無”	“有”	χ^2
4. できることなら	具体的・実現可能な内容 (全体) 対人関係：友達と仲良くしたい，〇〇と友達になりたい，人に好かれたい，私のことを理解してもらいたい 将来の生活：早く家に帰りたい，親と一緒に暮らしたい，大人になって自由になりたい，進学したい 遊び・スポーツ：遊びたい，旅行したい，水泳したい，マンガをよみたい，ピアノをひきたい 行動化：何でもする，一生懸命頑張る，自分でやる，いろいろやりたい その他：〇〇(ex, マンガ家・プロ野球の選手)になりたい，お金がほしい，社会のことを知りたい 抽象的・実現不可能な内容：もう一度生まれかわりたい，魔法が使いたい，普通の家庭に生まれたかった	85.5 ^(%)	87.5 ^(%)	
		10.8	8.5	
13. 私が知りたいのは	親・家族：家族・両親は今どうしているか，父(母)の過去，父(母)はなぜ家出(離婚)した，親の本当の気持ち	22.9	18.2	
	自分の将来：これから自分はどうなるのか，将来の生活・職業	7.2	6.3	
	自己：自分の性格，自分の本当の名前・親，自分が寮にいる理由	4.8	2.8	
	人間・心：人間・友達の気持ち，人が自分をどう見ているか，人間というしらけた生き物	15.1	14.8	
	たくさん：たくさんある，いっぱい，いろいろ	3.6	4.5	
	神秘：神，宇宙，人類滅亡はいつか，死後の世界，太陽	10.8	11.9	
	無し：ない	9.6	10.2	
その他：テストの答え，歌手になる方法，アメリカ，セックス，星の数	18.7	25.6		

* P < 0.1 ** P < 0.05 *** P < 0.01

ずかに上回っているにしかすぎない。

「13.私が知りたいのは…」という項目では，興味や関心の対象をとらえることを意図しているが，ここで示された傾向は公立中学生の結果とはかなりの差異が生じている。まず，養護施設の児童では(両親や家族は今どうしているか，父や母の過去，親の本当の気持ち)など，親や家族に関する事柄が全体で20.7%とトップである。もちろんこうした傾向は公立中学生ではまったく見られず，これまで何度も考察で指摘してきたように，彼らの親や家族に対する思慕の情や関心の強さには考えさせられるものがある。一方，公立中学生で最も高いパーセンテージを占めているのは宇宙や自然や生命の神秘性に関してである(23.9%)。神は本当に存在するのか，なぜ宇宙は無敵なのか，死後の世界はどうなっているのかといった神秘性への関心の高まりはこの年代の児童の1つの特徴なのであるが，養護施設の児童ではそれがほぼ1割程度でしかなく，公立中学生のちょうど半分である。また，自分の性格や他人の気持ちといった事柄に対する関心では，神秘性とは逆の結果がでている。養護施設の児童では，“人間・心”に“自己”のカテゴリーを加えた全体の平均は18.7%であるが，公立中学生はわずか4.6%と少

ない。養護施設の児童(とくに思春期・青年前期を中心として)は，自分を他者と比べ，性格や能力で劣っている部分について，あるいは仲間集団からどのように見られているのか，本当に受け容れられているのかといった事柄については非常に敏感になっているところがあるという点は，親や家族への関心の強さと同様，今回の文章完成法に現われた基本的な特徴の1つになっている。尚，自分の将来について知りたいというものだけは公立中学生(6.0%)とほぼ同率の6.7%という結果になっている。

7) 生活意識

養護施設の児童にとって，一日の内で長い時間を過ごす生活の場は学校と施設である。そこでまず学校生活については，肯定的反応に中立的客観的の反応を含めると両群で概ね70%以上が満足していることになる。ただ内容的には，満足の要因は遊びそのものや友人関係によるものがほとんどで，勉強することや授業内容をあげているものは2人しかいなかったが，少なくとも多くの児童が学校に対しては肯定的な感情を抱いていることにはまちがいない。こうしたことから，当然のことながら学校に否定的感情をもつものは全体で20%以下と少ないのであ

表II-7 生活意識

項目	カテゴリー：反 応 例	“無”	“有”	χ^2
8. 学校では	Pos (全体)	63.2 ^(%)	65.9 ^(%)	
	快適・楽しい：楽しい、おもしろい、明かるい、寮より好き	41.0	35.8	
	遊ぶ：〇〇して遊ぶ	11.4	13.6	
	友達：友達がたくさんいる、いい友ばかり、友達とよく話す	10.8	16.5	
	Neg：つまらない、暗い、疲れる、いじめられる、叱られる、嫌われている、友達がいない	19.9	17.0	
	Amb：おもしろいけど勉強は嫌い、友達とは仲良しだがつまらない	7.2	5.1	
16. 毎日の生活は	Nt：勉強してる、目立っている、普通、サッカーばかりしてる、寝てる	8.4	11.4	
	快適・楽しい：幸せ、けっこう楽しい、充実している、明かるい	46.4	34.7	*
	普通：まあまあ、普通、平凡、なんとかやってる	10.8	9.1	
	苦痛・厳しさ：がまんできない、地獄、つまらない、嫌だ、規則がうるさい	19.9	34.7	***
	怠惰：ダラダラしてる、だらしない、めっちゃうちゃ	6.0	2.3	
	Amb：おもしろいけど寮は嫌、楽しいけどよく叱られる、よい時と嫌な時がある	12.7	11.9	
Nt：忙しい、普通の家よりはよい、別に、野球してる、ギャグ	2.4	6.3		

* P < 0.1

*** P < 0.05

るが、そこで記述された反応の6割近くが（いじめられる・嫌われている・友達がいない）と、その背景には友達との関係で何らかのトラブルが存在することが予測される内容であった。こうした傾向は全体的に見ればほんの少数の児童にしか該当しないということになるが、児童本人にとってみれば深刻な悩みであり、そのまま放置されるならば大きな問題へと発展する可能性も内在している。友達にいじめられる・嫌われている、あるいは友達がいないといった悩みをもつ児童は、自分からその悩みを周囲の大人に打ち明けたり、相談することはめったになく、それだけ問題の発見が遅れることになるため、個人個人に対する緻密な援助や心の支えがどうしても必要になってくる。

最後に、毎日の生活全般についてどのような感情をもち、どのように認知しているかについては、非行傾向“無”群と“有”群の間には明確な差異が存在することが明らかになった。まず非行傾向“無”群では、毎日の生活を楽しい・充実していると感じているのは46.4%と多く、逆にがまんできない・嫌だと思っているのは19.9%と肯定的反応の半分以下である。一方、非行傾向“有”群では、毎日が楽しいと思っているのは34.7%いるが、毎日が苦痛だと感じているのも同様に34.7%もいる。これを統計的に見てみると、両群を比較して、毎日の生活を明かるく楽しく過しているのは非行傾向“無”群が危険率10%水準で有意に高く、逆に毎日の生活に苦痛や嫌悪を感じているのは非行傾向“有”群が5%水準で有意に高いことになる。非行傾向“有”群の3人に1

人が毎日の生活を苦痛と感じ嫌悪していることの理由としては、単に学校や寮での生活に不満や不安があるというのではなく、日常のさまざまな体験を通して感じられた葛藤やフラストレーション、それに劣等感情といったもろもろの感情に起因する自己存在の感覚の不安定さが、そのままここに反映されていると考えることができる。

(II) 「3つの願い」

ここでは、対象児の願望が主に何に向いているのか、を知ることにより、施設児のコンプレックスの所在を探ってみる。

調査票Q-II「今、神様があなたの願いを3つだけかなえてくれるとします。そしたらあなたは何を願いますか。具体的に3つあげてください。」前項の「4. できることなら…」と重複するようだが、この項は、より枠のない自由な記述にまかせた事で、家族欠損形態にある対象児が、最も心に深く願っていることは何か、又家族に対する関心の比率はどの程度かを分析した。

記述は多様であったので、次のように分類し、集計した。①家族との生活の願望、②親についての心配や思慕、③兄弟や系累についての心配、④友人関係のこと、⑤異性について、⑥才能、成績についての願望、⑦性格・習癖の改善、⑧容姿に対する願望、⑨健康や長命の願望、⑩お金や物の欲望（住居も含む）、⑪平和及び人類愛的な思想、⑫将来の夢や自由への願望、⑬非現実的な能力

への依存, ④親に対する反抗, ⑤世間に対する反抗。

結果は表Ⅱ-8に示すとおりである。

まず対象児全体で見ると、この結果(有効数 334人)では⑩のお金や物が欲しい子どもが最も多く(168人)、⑥の才能の願望(104人)が次で、⑫の将来の夢や自由への願望(85人)が3位で、4位、5位が②の親のこと(68人)、①の家族との生活(59人)のことを記述している。しかし、家族との生活、親、兄弟などのいわゆる家庭環境の構成因子をまとめると、140人の記述があり、⑩のお金や物への願望にかなり近い数を示す。また、⑩の中に「みんなで住める家が欲しい」など「家族」に関係のある記述がいくつかみられ、親や家族と一緒に住みたいという願望は年令的にみても、又現在の境遇からも妥当なことであると思われる。

次に、過去・現在とも非行傾向の無い者と1回でも非

行経験のある者とに分けてみると、表Ⅱ-8のようになる。これによれば、①の家族との生活の願望は比率からみて非行傾向の無群が有群より有意に高く、②の親についての心配や思慕も有意差は認められなかったが、同じ傾向がみられる。反対に、⑩のお金や物への欲望は非行傾向の有群の方が有意に高い。⑥の才能や成績の願望については、非行傾向の有群の方が、無群よりやや高い。⑫将来の夢、自由への願望は、非行傾向の無群の方が5%水準で有意に高い。

この対象児を他の側面からみると、即ち、親の欠損の有無によって、また生別、死別によって願望が異なるのではないかと考えられる。①の家族との生活の願望のある者についてみると、母親との死別群の中、この願望を記した者は20.4%、生別群19.3%、母親の欠損なし群では15.9%であり、父親の欠損なし群は20.9%、父親との死

表Ⅱ-8 「3つの願い」

3つの 願い 非行別	① 家族との生活の願望	② 親についての 心配や思慕	③ 兄弟や系累 についての心配	④ 友人関係のこと	⑤ 異性について	⑥ 才能・成績 についての願望	⑦ 性格・習癖の改善	⑧ 容姿に対する願望	⑨ 健康や長命の願望
	非行傾向 無 (%)	33 (21.4)	36 (23.4)	7 (4.5)	10 (6.5)	16 (10.4)	46 (29.9)	21 (13.6)	16 (10.4)
非行傾向 有 (%)	26 (15.4)	32 (18.9)	9 (5.3)	11 (6.5)	15 (8.9)	58 (34.3)	13 (7.7)	24 (14.2)	10 (5.9)
両群の差の危険率	P<0.01	0.3<P<0.5				0.3<P<0.5	0.05<P<0.1	0.2<P<0.3	
不明	3	1		2	2	5	3	2	1

3つの 願い 非行別	⑩ お金や物の欲望	⑪ 平和及び人類愛 の思想	⑫ 将来の夢や自由 への願望	⑬ 非現実的な能力 への依存	⑭ 親に対する反抗	⑮ 世間に対する反抗	⑯ そ の 他	⑰ 無 答	回 答 者 数 334人
	非行傾向 無 (%)	65 (42.2)	23 (14.9)	49 (31.8)	19 (12.3)	1 (0.6)	4 (2.6)	38 (24.7)	66 (42.9)
非行傾向 有 (%)	103 (60.9)	29 (17.2)	36 (21.3)	29 (17.2)	2 (1.2)	1 (0.6)	51 (30.2)	58 (34.3)	169
両群の差の危険率	P<0.01		0.01<P<0.05	0.2<P<0.3					
不明	3	2	2	1			1	1	11

⑮ 危険率の算出は χ^2 検定による

別群16.7%，生別群14.8%であり，従って親の欠損の形態と①は特に関係が高いとはいえない。では②の親についての心配や思慕についてはどうだろうか。母親との死別群の28.6%，生別群の22.7%，欠損なし群15.9%，父親との死別群の33.3%，生別群の22.1%，欠損なし群18.7%が②を記し，父母共に死別の場合が比較的高く，帰らぬ思い出に執着する傾向がみられる。（父母共に有意差の危険率 $0.2 > P > 0.1$ ）

次に，③の才能・成績についての願望の記述は知能指数や，学業成績評価と関係があるだろうか。IQが90～99群42.2%，100～109群34.8%，110以上群19.5%，の記述があり，知能が低い程，成績向上の願望があるとみることが出来る。学業成績と③をみると，小学校時，中学校時とも特に相関があるとはいえない。

分類には入らない「その他」の記述の中には，「幸せになりたい」「小さい頃に戻りたい」などがそれぞれいくつかあって，現在の環境の中で一般的な家庭の幸せな生活へのあこがれを抱いている者が多いことがうかがわれる。施設にいるために理想の家庭像に執着し，親との結びつきに期待を残していること，特に非行傾向無群にその傾向が強く，養護施設のあり方の難かしさを痛感させられる。

（Ⅲ）熱中できる対象について

調査票Q-Ⅲ「あなたはスポーツや趣味などで何か楽しく熱中できるものがありますか」

この回答によって，対象児が熱中してやる事柄はどんなことか，更に日常生活の満足度を知らうと試みる。

1) 熱中できるスポーツ・趣味

これについては殆んどの対象児が「ある」と答えて，非行傾向の有群が無群より僅かに高い比率を示している。

（表Ⅱ-9参照）

表Ⅱ-9 熱中できる対象の有無

非行別	熱中	無	有	無答	計(計)
非行傾向 無 (%)	17 (11.0)	137 (89.0)			154
非行傾向 有 (%)	12 (7.1)	155 (91.7)	2 (1.2)		169
不明・無答	1	10			11

危険率 $0.2 < P < 0.3$

2) 「それはどのようなことですか」

これについては非行傾向の有無に拘わらず，サッカーや野球などのチームスポーツで楽しみ，熱中してやっていることが解る。その他の陸上競技などのスポーツは少数だが非行傾向の有群の方がやや高い比率を示している。またスポーツ以外の趣味，釣り，読書，音楽を聞くこと，プラモデルなどは，表Ⅱ-10の「その他」の欄にまとめであり，この欄はすべて個人的な趣味である。これは，非行傾向の無群の方がやや高い比率を示している。

表Ⅱ-10 熱中する対象

対象	チームスポーツ	個人スポーツ	その他	無答	回答者数302人
非行傾向無 (%)	95 (69.3)	20 (14.6)	52 (38.0)	10 (7.3)	137
非行傾向有 (%)	106 (68.4)	31 (20.0)	45 (29.0)	10 (6.5)	155
不明・無答	4	1	7	1	10

3) 「それを今，やることができますか。」

結果は表Ⅱ-11のとおりである。これによれば，殆んどの対象児はいつもまたは，時々やる事が出来ると答えている。これについても，非行傾向の有無は関係がないとみることが出来る。

表Ⅱ-11 熱中できる対象をやれる度合い

非行別	度合	いつも	時々	全く無	無答	計
非行傾向 無 (%)	68 (49.6)	56 (40.9)	5 (3.6)	8 (5.8)	137	
非行傾向 有 (%)	79 (51.0)	61 (39.4)	6 (3.9)	9 (5.8)	155	
不明	5	4		1	10	

この調査結果からは，対象児の殆んどが楽しく熱中することのできるものを持っていて，またそれが出来る時間も或程度あることが解った。むしろ，少数ではあるが熱中できる対象のない子ども，また有っても「全くできない」と答えている子どもに問題があるとみることが出来る。その子たちは，満されない，不安定な日々を過しているのではないだろうか。施設では，ひとりひとりに園長や職員が目がいきとどいていることに期待するのみである。

（Ⅳ）友人関係（1. 親しい友達のもののような所が好きか）

小学校の高学年より中学生にかけて，今まで親に依存

していたものが、自分達のもっている感情や欲求を友達にむけることにより、仲間と共通体験を通じ、仲間関係を確立していくようになる。実際に子ども達は、友達のどのような面に好意をもってつきあっているのであろうか、非行傾向の“有”群と“無”群では、友達に対する意識が異なっているのか、などについて検討を加えてみたい。

方法としては、親しい友達の好きな所ということで選択肢6このうち2つを選んでもらい質問紙に記入してもらった。選択肢6こ以外にある人は、その他の項目に自由記述してもらった。

全体的傾向としては、表Ⅱ-12にまとめたが、どのような所が好きかという質問に対し、①気が合うから(60.7%) ②やさしいから(48.1%) ③親切だから(34.6%)となっている。その他の項目も多く、自由記述を分析してみると、①おもしろいから、②たのしいから、③相談にのってくれるから、④自分のことより人の事を考え、自分のことを理解してくれ、話しやすいから、⑤明かる

表Ⅱ-12 親しい友達のどのような所が好きですか (2つ選ぶ)

項 目	人数	%
① 気があうから	207	60.7
② やさしいから	164	48.1
③ よく教えてくれるから	46	13.5
④ 頭がいいから	13	3.8
⑤ リーダーとして立派だから	20	5.9
⑥ 親切だから	118	34.6
⑦ その他	83	24.3
無 答	7	2.1

いから、などが述べられている。次に非行傾向“有”群と非行傾向“無”群について、友達に対する感じ方どのような差がみられるかを検討してみる(表Ⅱ-13参照)。非行傾向“有”群と非行傾向“無”群両方に①気が合うから、②やさしいから、③親切だからという全く同じ傾向がみられる。しかし、その他の自由記述に於ては、「おもしろい」「たのしい」「相談にのってくれる」「話しやすい」「自分の事を理解してくれる」「自分より人のことを考えてくれる」などが、非行傾向“無”の群に多く「さっぱりしている」「明かるい」「やさしい」「はっきりしている」「男の子らしい」など性格面の良さに好感をもっているものが、非行傾向“有”群に多い。又過去に非

行が有って現在非行が“無”のものと、過去に非行が有って現在も“有”のものを比較検討してみる(表Ⅱ-14参照)。現在非行“有”群は、「気が合うから」が67.6%と最も高くこれは“無”群に比べ5%水準で有意差がみられる。「やさしいから」がそれにつぐが、現在非行“無”群は「親切だから」ということが“有”群にくらべやや多いと思われる。

表Ⅱ-13 親しい友達のどのような所が好きか 非行傾向⑥と⑦の場合の比較

項 目	非行傾向⑥		非行傾向⑦	
	人数	%	人数	%
① 気があうから	90	58.8	99	60.0
② やさしいから	74	48.4	81	49.1
③ よく教えてくれるから	23	15.0	21	12.7
④ 頭がいいから	3	2.0	10	6.0
⑤ リーダーとして立派だから	10	6.5	8	4.8
⑥ 親切だから	57	37.3	54	32.7
⑦ その他	42	27.5	37	22.4
無 答	2	1.3	5	3.0

表Ⅱ-14 親しい友達のどのような所が好きですか 過去に非行が⑥で現在非行が⑥⑦の場合の比較

項 目	過去の非行⑥			
	現在非行⑥		現在非行⑦	
	人数	%	人数	%
① 気があうから	47	54.0	46	67.6
② やさしいから	39	44.8	36	52.9
③ よく教えてくれるから	11	12.6	9	13.2
④ 頭がいいから	6	6.9	4	5.9
⑤ リーダーとして立派だから	5	5.7	2	2.9
⑥ 親切だから	31	35.6	20	29.4
⑦ その他	20	23.0	15	22.1
無 答	4	4.6	1	1.5

以上の結果から、「友達のどのような所が好きか」ということは、①気があうから、②やさしいから、③親切だからという3つにまとめられると思う。非行傾向“有”“無”の場合も同様な結果になっている。これは一般的な傾向でもある。過去に非行が“有”だったもので現在も非行“有”の場合と現在非行“無”の場合に特に「気が合うから」ということに有意差が認められる。特に小さい時から施設で育てられたものは、愛情に対しての欲求不満や、友人との葛藤、又劣等感などを感じ易くその結果、友達を求める場合は、自分が現在おかれている心理的状况に近い対象を求めるのであろう。その他の項目に於て自由記述をしてもらった結果からは、非行傾向“有”

群と“無”群にはっきり差がみられた。非行傾向“有”群が表面的な性格面に好意を持っているのにくらべ、非行傾向“無”群は、感覚的な面はあるものの内面的な心の結びつきを感じとり好意を持っているのである。

(V) 友人関係 (2. 友だちのどのような所が嫌いか)

子ども達は、大人との間では満たされなくなってきた欲求を友達に求める。しかし友達もお互いに未熟な存在であり、相手に対し不満が生じることもある。実際にまわりにいる友達に対しどのような所がきらいなのか、又非行傾向“有”群と非行傾向“無”群について友だちのきらいな点について差がみられるかについて検討を加えてみたいと思う。

方法としてはIVと同じだが、きらいな所の選択肢9のうち2つ選択してもらい、その他の項目は自由記述してもらった。

全体的傾向として「どのような所が嫌いか」という質問に対し(表II-15参照)①自分勝手だから(50.1%)

表II-15 きらいな友達がいるとしら、どのような所がきらいですか(2つ選ぶ)

項 目	人 数	%
① いじわるだから	63	18.5
② うそつきだから	41	12.0
③ 乱暴だから	43	12.6
④ いばっているから	115	33.7
⑤ すぐいじめるから	30	8.8
⑥ 自分勝手だから	171	50.1
⑦ 自分とは気があわないから	96	28.2
⑧ 泣き虫だから	16	4.7
⑨ その他	33	9.7
無 答	33	9.7

②いばっているから(33.7%)③自分とは気が合わないから(28.2%)となっている。その他の項目を検討してみると、①自分の自慢をする人、②かげでこそそそ悪口をいう人、③二重人格、④八方美人、⑤心の中で何と思っているかわからない人など、人間の内面にふれる意見が多く、すぐおこる、がんで、しつこい、くらい、など性格面で嫌いだとのべている場合も多い。又気持の悪い顔をしている、きたないなど容姿の面にもふれている。又

自分だけ幸せな人、相手の気持をわからない人など自己中心的な人に対しても嫌いだと述べている。

非行傾向“有”群と非行傾向“無”群について検討してみると(表II-16参照)“有”群の方は、①自分勝手

表II-16 嫌いな友達のどのようなところが嫌いか 非行傾向⑥⑦の場合の比較

項 目	非行傾向⑥		非行傾向⑦	
	人 数	%	人 数	%
① いじわるだから	32	20.9	27	16.4
② うそつきだから	16	10.5	22	13.3
③ 乱暴だから	17	11.1	24	14.5
④ いばっているから	57	37.3	48	29.1
⑤ すぐいじめるから	15	9.8	13	7.9
⑥ 自分勝手だから	82	53.6	72	43.6
⑦ 自分とは気が合わないから	37	24.2	54	32.7
⑧ 泣き虫だから	7	4.6	9	5.5
⑨ その他	10	6.5	22	13.3

だから、②自分とは気が合わないから、③いばっているからと述べられている。“無”群の方は、“有”群と順序が異なり、①自分勝手だから、②いばっているから、③自分とは気が合わないから、④いじわるだからと述べているが、「自分勝手」だからという項目では非行“無”群の方に多く、「気が合わない」という項目は“有”群の方が多という結果になっている。その他の項目から見ると、かげでこそそそいたり、二重人格だったりの内面的な面のことと、自己中心的な人について、又容姿などについて嫌だといっているものは“有”群に圧倒的に多い。性格面に関してやや“無”群の方が多。過去に非行“有”で現在非行“無”群と現在非行“有”群と比較すると(表II-17参照)現在非行“有”群と現在非行“無”群ともに、①自分勝手だから、②自分とは気が

表II-17 嫌いな友達のどのようなところが嫌いか 過去に非行有で、現在非行が⑥⑦の場合の比較

項 目	過去非行⑥⑦			
	非行傾向⑥		現在非行⑦	
	人 数	%	人 数	%
① いじわるだから	15	17.2	9	13.2
② うそつきだから	14	16.1	7	10.3
③ 乱暴だから	14	16.1	10	14.7
④ いばっているから	25	28.7	18	26.5
⑤ すぐいじめるから	4	4.6	8	11.8
⑥ 自分勝手だから	39	44.8	28	41.2
⑦ 自分とは気があわないから	27	31.0	24	35.3
⑧ 泣き虫だから	4	4.6	4	5.9
⑨ その他	11	12.6	11	16.2

あわない、③いばっているから、に高い率を示す。現在非行“有”群の方で「すぐいじめる」からがやや高い率を示しているが、全体的に有意差はみられない。

以上の結果から、友達の嫌いな所は、①自分勝手だから、②いばっているから、③自分とは気が合わないからの3つにまとめられる。その他の項目からみると非行傾向“有”群の方では、内面的に問題のある人、自己中心的な人、容姿などに嫌いな面を多くあげている。友だちを求める場合の一つの要因として自分の不安を解消するということがあると思う。不安解消のためには自分に心理的に近い対象を求め、自分の感情や欲求をぶつけ自分の不安な心理状態を理解し適切な対応をしてほしいという要求が存在するのであり、そこで自分勝手なものは嫌がられ除外されるのであろう。

(VI) あなたからみた施設の先生について

毎日の生活を一緒に暮らしているいわば家庭代替機能を果たしている施設の先生に対し子ども達はどのように感じているだろうかという点につき、非行傾向“有”群と“無”群について検討を加える。

方法としては、選択肢11の中より2つを選んでもらった。その他は、IV、Vと同様自由記述とした。

全体的傾向としては、かなりのバラつきがあるが(表Ⅱ-18)①おもしろい人(29.6%)②きびしい人(24.9%)③自分と性格があわない(24.6%)④たよりがいのある人(20.8%)という傾向がみられる。その他の項目について検討してみると、①うるさい人、②こわい人、③やさしい人、④自分のことをわかってくれる、⑤子どものことを理解してくれない、⑥話にのってくれない、もっと自分の話をきいてほしい、⑦いじわるな人などと述べている。非行傾向“有”群、非行傾向“無”群による施設の先生に対する見方としては(表Ⅱ-19)非行傾向“有”群は、①自分と性格があわない、②おもしろい人、③きびしい人、④自分のことをわかってくれない、とのべており、非行傾向“無”群の場合は、①おもしろい人、②たよりがいのある人、③きびしい人、という順番になっている、特にこの中で、「自分とは性格があわない」という人は、非行傾向“有”群と“無”群に於て5%水準で有意差がみられた。又「たよりがいがある」は10%水準に於て有意差がみられた。その他の項目についてみると非行傾向“有”群の方に「施設の先生は自分のことを理解してくれない」「うるさい」「自分勝手」「すぐなぐる」など先生に対し、悪いイメージをもっている

表Ⅱ-18 あなたからみた施設の先生について
(2つ選ぶ)

項 目	人 数	%
① お父さん お母さんみたい	25	7.3
② お兄さん お姉さんみたい	27	7.9
③ 親切にしてくれる	38	11.1
④ やさしくしてくれる	47	13.8
⑤ 暖かい人	30	8.8
⑥ りっぱな人	42	12.3
⑦ たよりがいのある人	71	20.8
⑧ 自分と性格があわない	84	24.6
⑨ 自分のことをわかってくれない	62	18.2
⑩ きびしい人	85	24.9
⑪ おもしろい人	101	29.6
⑫ その他	51	15.0
無 答	7	2.1

表Ⅱ-19 あなたからみた施設の先生について
非行傾向⑨と⑩の場合の比較

項 目	非行傾向⑨		非行傾向⑩	
	人 数	%	人 数	%
① お父さん お母さんみたい	11	7.2	12	7.3
② お兄さん お姉さんみたい	13	8.5	13	7.9
③ 親切にしてくれる	23	15.0	13	7.9
④ やさしくしてくれる	25	16.3	19	11.5
⑤ 暖かい人	13	8.5	15	9.1
⑥ りっぱな人	19	12.4	21	12.7
⑦ たよりがいがある	41	26.8	27	16.4
⑧ 自分とは性格があわない	28	18.3	50	30.3
⑨ 自分のことをわかってくれない	23	15.0	35	21.2
⑩ きびしい人	37	24.2	39	23.6
⑪ おもしろい人	46	30.1	47	28.5
⑫ その他	15	9.8	32	19.4
無 答	4	2.6	3	1.8

ものが多い。過去に非行“有”で現在非行“無”の場合の施設の先生に対する感じ方は、(表Ⅱ-20)①おもしろい人、②性格があわない、③きびしい、④自分のことをわかってくれないという順序になるが、現在非行“有”の場合、①自分と性格があわない、②自分のことをわかってくれない、③おもしろい人、④きびしい人、の順になる。この中で「おもしろい人」は現在非行“無”群の方に多く、10%水準で有意差がみられた。又「きびしい」というのも現在非行“無”の方に多く10%水準で有意差がみられた。

以上の結果から、施設では子どもたちは先生のことを

表Ⅱ-20 あなたからみた施設の先生について
過去に非行^④で現在非行が^⑤^⑥の
場合の比較

項 目	過 去 非 行 ④			
	現在非行 ^⑤		現在非行 ^⑥	
	人数	%	人数	%
① お父さん お母さんみたい	4	4.6	7	10.3
② お兄さん お姉さんみたい	7	8.0	6	8.8
③ 親切にしてくれる	7	8.0	6	8.8
④ やさしくしてくれる	8	9.2	10	14.7
⑤ 暖かい人	9	10.3	6	8.8
⑥ りっぱな人	10	11.5	10	14.7
⑦ たよりがいがある	16	18.4	9	13.2
⑧ 自分とは性格があわない	25	28.7	24	35.3
⑨ 自分をことをわかってくれない	18	20.7	15	22.1
⑩ きびしい人	24	27.6	12	17.6
⑪ おもしろい人	29	33.3	14	20.6
⑫ その他	15	17.2	15	22.1
無 答	2	2.3	0	0

お父さん、お母さんあるいはお姉さん、お兄さんみたいだというようにはほとんど考えていない、おもしろい人という見方をしているものが最も多い。しかし非行傾向“有”のものは「自分と性格があわない」「きびしい人」「自分をことをわかってくれない」などと述べている。非行傾向“無”群の場合には「たよりがいのある人」「きびしい人」と先生を信頼していることがわかる。その他の項目からみると非行傾向“有”のものは、先生に対し不満をのべている。過去に非行“有”で現在“無”の人については「おもしろい人」「きびしい人」について

有意差がみられる。先生の本当の意味のきびしさを自我の中にとり入れることができたのであろう。現在も非行傾向“有”の人は、「自分と性格があわない」「自分のことをわかってくれない」など一方的に欲求不満をのべることにとどまっているように思う。

欲求が満たされないと一方的に相手を批判し、自分を省みることがなかなかできないということは、この年頃の一般的傾向でもあると思われるが、特に非行傾向のあるものは、自己中心的であり、他人の立場にたつ事が困難といわれる。子どもたちが毎日の生活で、愛され、受け入れられているという、子ども達を思う先生の真剣な態度を敏感に感じとり、自分を支えてくれる1人の重要な対象として自己内部にとりいれることができるかどうかということが、その後の対人関係に大きな影響を及ぼすものと思われる。

参 考 文 献

- ① 池田由子（他）：中学生の精神衛生に関する研究、第三報、文章完成法テスト、精神衛生研究 Vol. 29 p.25-38, 1982.
- ② 西平直喜：青年心理学方法論、有斐閣 1983.
- ③ 水島恵一 非行臨床心理学 1980年 新生館
- ④ 平尾 靖 非行心理の探究 1980年 大成出版
- ⑤ 加藤隆勝 思春期の人間関係 1980年 大日本図書

No. _____

回答欄

児童名 【イニシャル】		1) 性別 (1. 男 2. 女)	2) 現在の年齢 歳	1)
			3) 学年 年生	2)
				3)

I. 施設歴

施設入所時年齢 歳		4)
施設入所理由 (具体的に記入してください)		5)
施設在所期間 (昭和60年5月1日現在) 約 年		6)
他施設(乳児院・養護施設・里親など)での在所経歴の有無 1. あり 2. なし 3. 不明		7)
(他施設在所経歴ありの場合)	現在までの通算在所期間 年 か月	8)
	最初の施設入所時年齢 歳	9)
	最初の施設の種別 1. 乳児院 2. 養護施設 3. 里親 4. その他 ()	10)
	通算在所施設数 か所	11)

II. 家庭環境

(注1)

家父	1. 欠損なし 欠損あり (2. 死別 3. 生別)	12)
(生別の場合) その理由	1. 離婚 2. 行方不明 3. その他 ()	13)
(欠損ありの場合) 欠損の時期	本児が 歳の時	14)
(欠損なしの場合) 職業	1. 自営業 被雇用 (2. 管理的職務 3. その他一般的職務) 4. パート 5. 無職 6. その他 () 7. 不明	15)
実父の問題点 (欠損の有無にかかわらず) 重複回答も可	1. 問題点なし 2. 酒乱・アル中 3. ギャンブル狂 4. ヤクザ 5. 犯罪者(拘禁中・保釈中) 6. 虐待(粗暴・性的加害・置き去り) 7. 養育拒否 8. 養育放任 9. 神経症 10. 精神病 11. 精神薄弱者 12. 身体障害者 13. 病気療養中 14. 偏愛 15. 覚醒剤 16. サラ金問題 17. 親として未成熟 18. 異性問題 19. 身辺処理能力なし 20. 放浪癖 21. 面会強要 22. その他 ()	16)

(注1)

実母	1. 欠損なし 欠損あり (2. 死別 3. 生別)	17)
(生別の場合) その理由	1. 離婚 2. 行方不明 3. その他 ()	18)
(欠損ありの場合) 欠損の時期	本児が 歳の時	19)
(欠損なしの場合) 職業	1. 自営業 被雇用 (2. 管理的職務 3. その他一般的職務) 4. パート 5. 無職 6. 主婦 7. その他 () 8. 不明	20)
実母の問題点 (欠損の有無にかかわらず) 重複回答も可	1. 問題点なし 2. 酒乱・アル中 3. ギャンブル狂 4. ヤクザ 5. 犯罪者(拘禁中・保釈中) 6. 虐待(粗暴・性的加害・置き去り) 7. 養育拒否 8. 養育放任 9. 神経症 10. 精神病 11. 精神薄弱者 12. 身体障害者 13. 病気療養中 14. 偏愛 15. 覚醒剤 16. サラ金問題 17. 親として未成熟 18. 異性問題 19. 身辺処理能力なし 20. 放浪癖 21. 面会強要 22. その他 ()	21)

石井他：年少非行に関する研究（第5報）

主な養育者 （*下から該当する番号を） （それぞれ選んで下さい）	22 乳児期	23 幼児期	22)
	24 小学校在学時期	25 中学校在学時期	23)
	1. 実父実母 2. 実父 3. 実母		24)
	4. 実継父母 5. 祖父母 6. 養父母		
	7. その他の親族 8. 保護・養護施設 9. 養育者が転々		
10. 不明 11. 回答不能（本児がその年齢に達していない）			
12. その他（ ）		25)	

家庭の生活程度	1. 富裕 2. 普通 3. 貧困 4. 要扶助 5. 不明	26)
生活保護受給の有無	1. 受けていない 2. 受けている	27)

（注1） 親と子の関係が没交渉であっても、法律上は親子である場合は“1. 欠損なし”に入れて下さい。

Ⅲ. 親と子の人間関係

以下、父親（役）又は母親（役）のある者のみ、該当番号を右欄に記入して下さい。

		回答欄	
		父親 （役）	母親 （役）
親（役）と本児の接触 （面会に来る、家庭に連れて帰るなどがあるか）	1. まったくない 2. ほとんどない（年に1, 2回位） 3. たまにある（年に5, 6回位） 4. ときどきある（月に1回位） 5. たびたびある（週に1回位）	28)	29)
本児に対する関心 （どんな生活をしているか、学校の成績はどうか、何を望んでいるかなどに対する関心の度合）	1. 低い 2. 低いほうである 3. 普通 4. 高いほうである 5. 高い	30)	31)
親（役）に対する本児の態度 （重複回答も可）	1. 親和的 2. 信頼している 3. 無関心 4. 冷淡 5. 葛藤が強い 6. 拒否的 7. 憎悪感をもつ 8. はっきりわからない 9. その他（ ）	32)	33)
本児に対する親（役）の 養育態度	A 1. 放任・拒否的でめんどうみが悪い 2. どちらかという 放任・拒否的でめんどうみが悪い 3. どちらともいえない 4. どちらかというと保護的・受容的でめんどうみがよい 5. 保護的・受容的でめんどうみがよい	34)	35)
	B 1. 気まぐれ 2. どちらかという気まぐれ 3. どちらとも いえない 4. どちらかという一貫性あり 5. 一貫性あり	36)	37)
	C 1. 愛情薄い 2. どちらかという愛情薄い 3. どちらとも いえない 4. どちらかという愛情厚い 5. 愛情厚い	38)	39)
	D 1. きびしい 2. どちらかというきびしい 3. どちらとも いえない 4. どちらかというやさしい 5. やさしい	40)	41)
	E 1. 感情的ですぐカッとなる 2. どちらかという感情的で すぐカッとなる 3. どちらともいえない 4. どちらかとい うとおだやか 5. おだやか	42)	43)

IV. 性格特徴

本人の性格特徴について下記の中から該当する番号を記入してください

回答欄

	1.	2.	3.	4.	5.		
	非常に	大体	普通	少し	非常に		
44. 明るい	-----					暗い	44)
45. すなおである	-----					強情である	45)
46. おおらかである	-----					物事を気にしすぎる	46)
47. 意志が強い	-----					意志が弱い	47)
48. 独立心がある	-----					依頼心が強い	48)
49. きちようめんである	-----					だらしがない	49)
50. やる気がある	-----					やる気がない	50)
51. 目立たないことでもする	-----					目立つことが好き	51)
52. 根気がよい	-----					あきっぽい	52)
53. 気分が安定している	-----					気分がかわりやすい	53)
54. 感情表現が豊かである	-----					感情表現が乏しい	54)
55. がまん強い	-----					かっとなりやすい	55)
56. 人なつこい	-----					人みしりする	56)
57. 甘える	-----					甘えない	57)
58. 思いやりがある	-----					思いやりがない	58)
59. 協調性がある	-----					協調性がない	59)

V. 施設内での様子

本児の施設内での様子について下記の中から該当する番号を記入してください

回答欄

	1.	2.	3.	4.	5.		
	非常に	大体	普通	少し	非常に		
60. 扱いやすい	-----					扱いにくい	60)
61. 気持ちに通じる	-----					気持ちに通じない	61)
62. 人に好かれている	-----					人に嫌われている	62)
63. 弱いものにやさしい	-----					弱い者をいじめる	63)
64. リーダーシップがとれる	-----					リーダーシップがとれない	64)
65. 決めたことを守る	-----					勝手に振舞う	65)
66. 職員に協力的	-----					職員に協力的でない	66)
67. 年の割に幼い	-----					年の割に大人ばい	67)
68. 施設への適応はよい	-----					施設への適応は悪い	68)
69. 施設内の子ども達との人間関係はよい	-----					施設内の子ども達との人間関係は悪い	69)
70. 職員との人間関係はよい	-----					職員との人間関係は悪い	70)

その他、施設内の様子で特に気づいたことがありましたら、具体的に書いてください。

()

本児を扱う上での方針があれば番号を選んで○印をつけてください（3個以内）

- | | | |
|------------|------------|------------|
| 1. 甘えさせる | 2. やさしくする | 3. 面倒をみる |
| 4. 話をよく聞く | 5. 話かける | 6. 信頼する |
| 7. 意志を尊重する | 8. 支持する | 9. 方向づけをする |
| 10. 助言をする | 11. 励ます | 12. ほめる |
| 13. 褒美を与える | 14. 慰める | 15. 注意する |
| 16. しつける | 17. きびしくする | 18. 叱る |
| 19. 罰を与える | 20. 無視する | |

回答欄

71)

* その他の方針があれば具体的に書いて下さい。

()

VI. 本人について

非行・反社会的問題行動

回答欄

過去において、下記のような非行や反社会的問題行動をしたことがありますか	1. なかった 2. あった（何歳頃ですか） 3. 不明	73)
（過去にあった場合）下記から該当する番号を選んで下さい（重複回答も可）		74)
現在、下記のような非行や反社会的問題行動をすることがありますか	1. なし 2. あり	75)
（現在ある場合）下記の中から該当する番号を選んで下さい（重複回答も可）		76)

（反社会的問題行動の番号） 1. 喫煙 2. 飲酒 3. 嘘言 4. 無断外出 5. 無断外泊（家出含む） 6. 盛り場徘徊 7. 盗み（乗物盗・万引も含む） 8. 不審な金銭所持 9. 反抗 10. 暴力行為（傷害も含む） 11. 恐喝・脅迫 12. 不良交友（非行グループ・暴走族への加入も含む） 13. シンナーなどの薬物遊び 14. 不純異性交友 15. 性的問題（性的いたずら・わいせつ行為など） 16. 売春 17. その他（具体的に)

非社会的問題行動

過去において、下記のような非社会的問題行動をしたことがありますか	1. なかった 2. あった（何歳頃ですか） 3. 不明	77)
（過去にあった場合）下記の中から該当する番号を選んで下さい（重複回答も可）		78)
現在、下記のような非社会的問題行動をすることがありますか	1. なし 2. あり	79)
（現在ある場合）下記の中から該当する番号を選んで下さい（重複回答も可）		80)

（非社会的問題行動の番号） 1. 夜尿 2. 遺尿 3. 指しゃぶり 4. 夜驚 5. ねぼけ 6. 自慰・性器いじり 7. チック 8. 自傷行為 9. 場面緘黙 10. 登校拒否 11. 拒食 12. 過食 13. 偏食 14. 逃避的傾向 15. 臆病 16. 強い劣等感 17. 無気力 18. 内閉的傾向 19. ひねくれ 20. 情緒不安定 21. 自殺未遂 22. 神経症（具体的に) 23. その他（具体的に)

心身発達上の問題

知能段階 (具体的なIQ =)	1. 59以下	2. 60~69	3. 70~79	81)
	4. 80~89	5. 90~99	6. 100~109	
心身発達上の問題の有無	1. 問題なし	2. 問題あり	82)	
(問題ありの場合) 下記の中から該当する番号を選んで下さい (重複回答も可)				83)

(心身発達上の問題の番号) 1. 脳波異常 2. てんかん 3. 精神発達遅滞 4. 身体発育の遅れ
 5. 虚弱体質 6. 肢体不自由 7. 言語発達の遅れ 8. どもり 9. 難聴 10. 弱視
 11. 喘息 12. その他 (具体的に)

学校への適応

学業成績	○小学校時「 」	1. 良好	2. どちらかというと良好	84(小学)
	○中学校時「 」	3. 普通	4. どちらかという和不良	
		5. 不良	6. 不明 7. 回答不能	85(中学)
学校生活で下記のような問題がありますか	1. なし	2. あり	86)	
(問題ありの場合) 下記の中から該当する番号を選んでください (重複回答も可)				87)

(学校生活での問題の番号) 1. 学力不振 (おちこぼれも含む) 2. 遅刻 3. 無断欠席 (授業をさぼるも含む)
 4. 登校をしぶる 5. 登校拒否 6. いじめをする 7. 校内暴力 8. いじめられる
 9. 孤立 (仲間はずれ, 友人がほとんどいないを含む) 10. 校則違反をする 11. 教師とトラブルがある (具体的に)
 12. 学友とトラブルがある (具体的に)
 13. その他 (具体的に)

年齢： 歳 男・女

〔つぎのQ-IからQ-VIのそれぞれについて、思いついたことをそのまま記入してください。よろしく願
います。〕

Q-I. 最初にいろいろ書きかけの文章が並んでいます。その言葉をみて頭に浮かんできたことを、それにつづけて
書き、一つの文章を完成させてください。

(例) 本を読むと いろいろなことを知ることができるから楽しい。でもマンガが一番好きです。

1. 子供の頃、私は _____
2. 人に親切にされると _____
3. 私の友達は _____
4. できることなら _____
5. おもしろくない気分の方は _____
6. 私の将来は _____
7. 父のことは _____
8. 学校では _____
9. 私にとって家族というのは _____
10. 悪いことをしたら私は _____
11. _____
11. 人に比べて私は _____
12. 思いきり _____
13. 私が知りたいのは _____
14. 人から注意を受けると _____
15. 不安なのは _____
16. 毎日の生活は _____
17. 心をうちあげられるのは _____
18. 家の人は私のことを _____

19. 私はずかしいと思うことは _____
20. 私はよく人から _____
21. 母のことは _____
22. 私は自分のことを _____
23. 人に対して私は _____
24. とても気にかかるのは _____
25. 何よりも大切なことは _____
26. 世の中の人 _____

Q-Ⅱ. 今、神様があなたの願いを3つだけかなえてくれるとします。そしたらあなたは何を願いますか。具体的に3つあげてください。

1. _____
2. _____
3. _____

Q-Ⅲ. あなたはスポーツや趣味などで何か楽しく熱中できるものがありますか？

- ・ない
- ・ある ———— {
 - ・それはどのようなことですか？
 - 具体的に (_____)
 - ・それを今、やることができますか？
 - 1. いつもできる
 - 2. 時々できる
 - 3. 全くできない

Q-Ⅳ. あなたは親しい好きな友達がありますか。いるとしたらその友達のどのようなところが好きですか。次の中から2つ選んで○印をつけてください。

- | | |
|---------------|------------------|
| 1. 気が合うから | 5. リーダーとしてりっぱだから |
| 2. やさしいから | 6. 親切だから |
| 3. よく教えてくれるから | 7. その他具体的 |
| 4. 頭がいいから | (_____) |

Q-V. あなたは嫌いな友達がありますか。いるとしたらその友達のどのようなところが嫌いですか。次の中から2つ選んで○印をつけてください。

- | | |
|-------------|-----------------|
| 1. いじわるだから | 5. すぐいじめるから |
| 2. うそつきだから | 6. 自分勝手だから |
| 3. 乱暴だから | 7. 自分とは気が合わないから |
| 4. いばっているから | 8. 泣き虫だから |
| | 9. その他具体的に |
| | (_____) |

石井他：年少非行に関する研究（第5報）

Q-VI. 施設（学園）の先生の中にあなたからみて次のような先生がいますか。もしいたら次の番号の中から2つまでを選んで○印をつけてください。

- | | |
|-----------------|-------------------|
| 1. お父さんやお母さんみたい | 7. たよりがいがある |
| 2. お兄さんやお姉さんみたい | 8. 自分とは性格が合わない |
| 3. 親切にしてくれる | 9. 自分のことをわかってくれない |
| 4. やさしくしてくれる | 10. きびしい人 |
| 5. 暖かい人 | 11. おもしろい人 |
| 6. りっぱな人 | 12. その他具体的に |

(

)

※どうもありがとうございました。この用紙は封筒に入れてのりづけし、先生にわたしてください。
また、サインペンはお礼ですので、ご自由に使ってください。

Study on Juvenile Delinquency(Report 5)

—Research Study on Delinquent Disposition of
Juveniles resided in the Homes for Dependent,
Neglected and Abused Children —

Tetsuo ISHII
Toshiko GONDAIRA
Hisao KANDA
Kiyoe YAMAMOTO
Masao KIKKAWA
Utako NODA
Ryoko HIEDA
Yukio SHIMOHIRA
Kazuo FUKUSHIMA
Shigeo HASEGAWA

We have made a series of studies of juvenile delinquency. The purpose of the present study is to narrow the subjects down only to the juveniles resided in the Homes for Dependent, Neglected and Abused Children and to grasp the main factors of the occurrence of delinquency by approaching from such aspects as the family environment, life history, living condition in the Home of each juvenile.

Research Method The subjects were 345 juveniles resided in the Homes for Dependent, Neglected and Abused Children(36 Homes, 10 to 16 years old). Each subject and Home staff members were handed separate investigation sheets and asked to answer each item on the respective sheets. The main items asked of the staff members for the investigation included each juvenile's resident history, family environment, parent-child relationship, personality features and behaviors in the Home. As to each juvenile, his/her self-image, family-image, desire, interest, human relations were investigated by SCT and questionnaire method.

Analysis of the Results. The classified total of the answers of the group of the juveniles having delinquent disposition and the group of the juveniles having no such disposition was computed respectively, and both results were analysed and compared. Significant differences were found between these two groups in resident history, family environment, behavior characteristics in the Home and personality features. It was also found that the juveniles having delinquent disposition generally had more negative inclination about their self-images, family-images, the modes of dealing with their desires and human relations than the juveniles having no delinquent disposition.